

国際俳句 フェスティバル

International Haiku Convention 2002

記録集



芝不器男俳句新人賞

◎趣意

「彗星の如く俳壇の空を通過した」(横山白虹)と評された芝不器男は、現在の愛媛県・松野町松丸に生まれ、鬼北盆地の豊かな自然と俳句好きの家庭の中に育った。昭和初期の数年間に活躍し、天折・望郷の俳人とも呼ばれる不器男が遺した俳句は、僅か二百余句に過ぎない。しかし、一つひとつの句の持つ豊かな抒情性と瑞々しい詩性は、その後の昭和俳句の先駆けとなるものであった。

不器男の名を冠するこの賞は、新鮮な感覚を備え、大きな将来性を有する若い俳人に贈られる。この賞が誘因となって、今世紀の俳句をリードする新たな感性が登場することを強く願っている。

◎対象

俳句を募集のうえ、最も優れた者に賞を贈る。

◎募集内容

応募百句(過去三年間に既に発表した句でも可)

応募資格は昭和38年1月1日以降生まれの者(40歳未満)

◎募集期限

平成14年9月21日(土)

◎種類

芝不器男・俳句新人賞(一名)

正賞…松野町ガラス工芸品 及び デイプロマ(授賞証書)

副賞…賞金30万円、句集発行(平成15年度に出版予定)

選考委員奨励賞(数名)

正賞…松野町ガラス工芸品 及び デイプロマ(授賞証書)

副賞…記念品

◎選考

応募者氏名秘匿のまま、選考委員会の審議により受賞者を決定する。

なお、応募者の年齢については、作品毎に明らかにした。

◎選考委員会

大石 悦子 俳人
城戸 朱理 詩人
齋藤 慎爾 俳人(深夜叢書社社主)
対馬 康子 俳人
坪内 稔典 俳人(佛敎大学教授)

参与 西村我尼吾 俳人

◎選考経緯

平成14年3～4月 賞内容等に関する討議
平成14年4月30日 応募開始
平成14年9月21日 応募締切り(応募総数…156編)
平成14年10月26日 選考委員会開催(予備選考)
平成14年11月5日 場所…東京都千代田区 都市センターホテル 703会議室
平成14年11月30日 予備選考結果 公表(予選通過…31編)
平成14年11月30日 国際俳句フェスティバルにおいて公開審査会を開催、受賞者決定
平成15年4月19日 場所…愛媛県松山市 愛媛県民文化会館 第6会議室
芝不器男生誕百年祭にて表彰(予定)
場所…愛媛県松野町 松野町コミュニティセンター

◎受賞者紹介(敬称略)

芝不器男俳句新人賞 大阪府 富田拓也

選考委員奨励賞

大石悦子奨励賞 兵庫県 小田涼子
城戸朱理奨励賞 東京都 関 悦史
齋藤慎爾奨励賞 宮城県 佐藤成之
対馬康子奨励賞 福井県 松原藍夏
坪内稔典奨励賞 東京都 神野紗希

○お知らせ 一 授賞式は、芝不器男生誕百年祭にて行われます。

と き…平成15年4月19日(土) 9時30分

ところ…愛媛県松野町「松野町コミュニティセンター」

二 富田拓也氏の新人賞授賞作品は、平成15年度に出版されます。

選考委員奨励賞授賞作品

○大石悦子奨励賞

兵庫県 小田涼子

初刷を手に父戻る深夜かな
恋の猫浮きの間を通りぬけ
紅梅や一等兵の墓ひとつ
弟のぐつすり眠る梅林
下萌えや真つ白な猫眠りをり
雛人形みな福耳でありにけり
春の雪飲食街をぬけにけり
春夕焼原生林に犬の声
釣りをする少年ひとり水草生う
つちふるや学習塾の窓開く
つちふるやツタンカーメン発掘記
下校児の鈴の音高し鳥雲に
蘆の角真鴨の黒く光りけり
木々芽吹く大教室は昼休み
藪椿母との距離を少しとり
恋のうた流れてきたる黄水仙
絵の中の異人ばかりや花ミモザ
春の雲エンジンの音重なりぬ
分校に近づき杉の花にほふ
花吹雪木馬にしがみつく子かな
仕出し屋の電話を借りぬ花の屋
文庫本買うて家路や夕桜

夕桜柵の向かうの白き猫
先輩と呼ぶ声高し春の海
花束の打ち上げられし春の磯
囀りや熱帯雨林に立つごとし
鳥の恋ポート乗り場に並びをり
黒猫の大きな貌や竹の秋
嘴の光つてゐたり春の池
風光るあひる何度も顔洗ふ
男女混合サッカーチーム風光る
老人の菜の花畑に浮かびをり
菜の花や背後を過ぐる乳母車
菜の花やメリーポピンズ飛んで来し
花菜風子犬の耳の裏返る
菜の花や鉄触れ合うて音響く
遠足の児の箸箱を開けられず
夏近しショートカットの少女たち
葉桜や声出して読むフランス語
病名の明かされずある若葉かな
切符透く胸のポケット柿若葉
鉄線花祖父の大きな独り言
領事館の小さき表札桐の花
ポケットに出さぬ葉書や桐の花
流木をくはへし犬や夏の雲
天井に届く古本麦の秋
老人の高き鼻なり麦の秋
家庭教師終へあぢさゝるを貰ひけり

地下鉄にあじさみ抱へ乗りにけり
走り梅雨地下から返事してゐたる
青梅雨や色あせし絵を見てゐたる
夏の霧外国船の現るる

夏の雲庭より机運び入れ

ポスターを貼りゆく人や五月闇

青枇杷に昨日の月の残りけり

手芸店開店真近枇杷熟るる

先生と呼ぶるる老女初螢

夏の蝶大樹を越えて消えにけり

渡仏する友夏帽子新しく

塗り絵して母親を待つ夏帽子

青鬼灯祖母のいなりの大きかり

地球儀を照らしてゐたり夏の月

夏の月外車連ねて走る街

義経を演ずる少女月涼し

鳴焼や静かに食べる昼ごはん

青田風園児のたたく大太鼓

宇治橋の貫いてゐる大暑かな

水琴窟に耳すませたる晩夏かな

夏の果兵舎の中の鉄兜

遠花火父の通知簿見てゐたり

遠花火一人になつてをりにけり

天の川父との会話すぐ途切れ

稲の秋琵琶湖に少し波のあり

町流しきびすを返す風の盆

幼子の歌ふ恋歌風の盆

音楽館に灯の残りをる夜長かな

旅立ちの朝のかほちやを炊いてゐる

鶏頭花本屋の裏に居つく猫

竹の春右に彫られし文字を読む

秋の空朝礼台を運びをり

石段の中の石仏秋の風

秋風や廃屋に住む黒き猫

秋の雨ガラスの指輪買ひにけり

鴉鳴くや女子学生の声に似て

親戚の作るりんごを手土産に

病む母に甘柿二つ買ひにけり

サガの夕景といふ白菊のありにけり

島の子の運動会に加はりぬ

青みかん職員室に置かれあり

秋の虹上着をかけてくれにけり

老記者の最終講義冬始め

新しき眼鏡を買ひぬ冬はじめ

新しき橋のかかりぬ七五三

落葉持ちちかくれんぼする園児かな

初氷大観覧車映しけり

冬濤や車窓に残る雨の筋

大焚火貫ひに鬼のやつて来し

助教授の闇に消えゆくマントかな

冬満月がらりと広き能舞台

極月の花束に席ゆづらるる

○城戸朱理奨励賞

東京都 関 悦史

「マクデブルクの館」

内界ニ洋館浮イテ眠ラレズ

膿胞ノ如ク館ノ美シキ

黒外套ノ無想ノ師弟到着ス

姉ノ横死ノ刹那ノ視野ノシヤンデリア

嘆キツツ崩レ溶ケタル姉ノ快

腐敗ノ熱ノ白鳥ノ首向キ變ハル

生涯不犯ノ伯父モ行方知レズトヤ
階段ヲ自動人形ガ上リ來ル
地下ニ亡父ニ磨キコマレシ《鐵ノ處女》
眞青ナ文盲ノ魚飛ビ交ヘリ
頭上ノ魚ハ我ガ内耳ニモ産卵ス
地圖延ベテ領地女陰ノ形ヲナス
崖ヲ落ツ少年眞白キ瓦解
《フランシス》トイフ大蜻ノ通り過ゲ
藏書ミナカプカプ翼疊ムナリ
曾祖父ノ不可思議ナメモ舊約ヨリ
「君トナラトモニ殺セル青イ鳥」
車椅子倒レ庭中女身生エ
婚約ノ兄臯ノ頭部シテ
宴マツ串刺シニナル調律師
コレヨリハ宴ヲ法ト心得ヨ
往診ノ主治醫靴ニ喰ハレツツ
鄰席ノ鶏ト築城術ノ話
弦樂四重奏團互ヒノ肉ヲ裂ク調べ
沒藥ヤ卓布ノウヘニ生ルル舌
喰ハレヌタメニ舌客トモヲ毆リツツ
モガキツツ薔薇鐵皿ニ燒キアガル
大宇宙ヒトノモノ喰フ音ニ荒レ
當主見ユ皆ニ不在トシテ見ユル
トルソーノ濃キ陰毛ヲ遺産トス
令嬢ノ動力トシテ猫ノ放電
齒車式ノ求婚者タチ明滅ス
魚スベテ腹見セテ浮ク遁走曲カナ
肉厚ノ唇ノヤウナル菓子イロイロ
奴婢斬レバ斬ルダケ増エテ酒ヲ呑ム
鴉鳴クヤ時計塔ニモ肉詰マリ
液ノ警部ノ聲通ルナリ銀杯ヨリ
全員假面ノ鑑識係ノ亂癡氣騷ギ

海流ヤ首ヲランプトシテ掲ゲ
口笛ハ無人ノ渚漂ヘリ
探偵ニ廢船ノ蟲眩キアフ
取り落トス杯彈ミ終ヘタル死
郊外ノ野ニ被害者ノ羽根ヲ拾フ
霧モ蛾モ贖物バルコニーデノ密談
バルコニーノ椰子ニ刑事ガ卷キ込マレ
論據ノヒトツニ院長ノ尾ノ百合ノ藥
軋ミツツ人形タチガ聞ク悲鳴
屋根裏ノ白髮 人形ガ足リヌ
物見高キマネキンタチドノ現場ニモ
積ミ上ゲシ調書殘ラズ羽バタキマリ
一族會食《鈍器ノヤウナモノ》ヲ想ヒ
晚餐ノ皿ニ各自ノウロポロス
天井裏ノ刀自ハ時々骨牌ニ入ル
遠ツ祖ハ牛ノ頭ヲモツトモイフ
法典ノ裏ニ毒飼フ書庫ヘ蝶
ガラス器ノ奇形ノ胎兒オヨソ百
寢室ニ星屑粘ク揉ミアフヤ
死ヌ前ノ胸郭ヲ霧吹キカヨフ
ツルツルト主殺メテ紐歸ル
廻廊ニ遺體波動説モテ隠ス
兄病ンデ無聊ニ神トナルコトモ
燭臺持チ女装ノ兄ノ時化ノ入水
別ノ美童半バハ鳥トナツテ死ニキ
髭文字ノ髭繁リツツ死者膨レ
空間ノ裂目ヨリ手が垂レ下ガル
誤リテ頭部ニ《オフェーリア》ト名ツク
依然下界ニ死人ノ頭見ツカラズ
半熟ノ黄身掬ヒツツ頭ノ行方
口サガナキ古代ノ貝ラ床ニ沈ミ
壁割ツテ女教師ノ髮伸ビ出ヅル

肉食ノ階段ナレバ滑リ易シ
食卓ノ枯野ガ鳥ヲ獲ル午餐

囊ヨリ執事出仕ス球雷ノ如ク

雙子ノ姉妹戯レニ成ル《ウロボロス》

肖像ノ無道代々黄變ス

複眼ノ廢帝牢ニ柘榴啖フ

廊下ノ牛ガ腦中深ク迷ヒ込ム

地下温ク眼球遊ブ湖ガアリ

椿剪ル未ダ死ナヌ者數ヘツツ

角一對英國式ノ庭ニ撒ク

器官ナキ遺體ト名乗ル人來タリ

首モゲテ陶製ノ母鳩ニ喰ハレ

毀サレルタメノ美童ニ降ル光

被疑者ドモ名指シアツテハカム遊ビ

カミアツテ螺旋ニ透ケル生者死者

名推理ノ如ク次々皿現レ

皿皿皿皿皿皿皿皿皿皿

鏡ヨリ見知ラヌ我ノ迫リ來ル

手足百二百三百月一ツ

渦卷イテ館燒ケソム頭ノ内外

八重咲キノ婦人ヲ名指シ探偵ハ

名指サレタ婦人ハ紀元前カラ難所デアツタ

犯人ヲ染ミ出ズ蜜ト藥無量

大團圓 魂紛レミンナ緞帳

ヲリモセヌモロモロノ死兒沈ミユク

不眠ノ皆ガ毛深キ瓶ニ靈ヲ插ス

死ンデナホ性トイフ修羅止マザリキ

卵生ノ僧ハ世界ノ裏テ嘔フ

生マレテハ毀レテ肉ガ歌ヲ詠ム

魂トイフノモ寄生蟲デアラウ

○齋藤慎爾奨励賞

宮城県 佐藤成之

手に負えぬ春の闇からインド人

ダイス振る春の体積はかると

青春のまっただなかのレタスカな

掃除機で吸いとる空よ修司の忌

紫陽花にまだ未使用の恋がある

耳鳴が集まってくる海の家

魂をむき出しトウモロコシを食う

棒立ちのままの八月十五日

夕焼が見たくて放火したという

極彩の日本が発火する晩夏

鯛の後がつかえている対岸

空前のエクスタシーの曼珠沙華

液体になるまでいだ抱き合う良夜

鬼灯の熟れて故郷が見つからぬ

抜殻のような空あり摂津の死

まばたきを忘れて冬の星になる

顕微鏡覗けば冬の星座の巢

冬母とは星雲の舌ざわり

凍蝶は星を殺めるため生きる

希望的観測オリオン座のあたり

春はあけぼのピリオドのみのメール打つ

春の雲どすんと象が落ちてくる

春の波集まってくる膝頭

かたつむり時間の継目をこぼれ落つ

なぞなぞはおわらぬげじげじむかでけら

希薄的夏乱反射的微笑

夕焼の不足している鳥瞰図
過去はもう忘れまじと貝釘

振り絞る勇気の色よ夏野菜

日めくりの青空誰もいない夏

白桃に羽が生えたり恋すれば

捨石となれよ銀河はまだ熱い

流星は家出少年にはあらず

名月の沸騰点へ石を積む

白骨と化すまで月光を捨つ

くしゃみしたはずみのような昨日今日

ワタクシノ空気入替去年今年

恋をしただけ梟のねじを巻く

唐突に恋の転がる春の丘

陽炎はいま恋人になるところ

春の海涙は片目ずつ溢る

雨上がる薔薇の血抜きも終えしころ

さくらんぼ余る未生の姉がいて

爪痕を残さず消える虹なのか

海月透くようにいき呼吸する未青年

黒板を飛び出す飛行機雲の夏

蝉の貌壊れ始める児童館

朝顔が歌詞を忘れて咲いている

海の字より母を連れ出す晩夏かな

空白の夜を転がる桃であり

枕辺に積む月光という遺産

国境を越えて愚かな木の実降る

冬日とは緩やかなる忘却線

ザラ紙に父の昭和が暮れ残る

チューブより絞りたてなる初景色

白鳥の向きを変えれば理想郷

海の本立ち読みをする実朝忌

青空を裾からめくる春の波

象潟は恨むがごとく水温む

藤棚に夜の動悸のあふれおり

来世あり交流中の新樹あり

夏草の軋みが陸奥の闇を生む

光陰矢のごとし子子沸騰す

淋しいといえず赤眼となりし蠅

蚩袋今度ほどの子盗ろうかな

蛇衣を脱ぐ身に余る夢を見て

性愛の一部始終の蝉時雨

八月の空あり海と縫い合わす

今は昔月の山より泣き崩れ

かあさんはぼくのぬげがらななかまど

あたふたと夕日溺れる紅葉谷

来世へとはみ出している大海鼠

諸肌を脱ぎたるごとき初山河

者凝りて彼の世の闇を呼び覚ます

雪暗の女陰・涅槃図・子守唄

阿弓流為の空に風花上書きす

またの名は悪路王なり落椿

エロスあり一筆書きの土筆ほど

天と地のへし合い邪馬台国の春

春の虹サンドイッチを飛び出せり

春色の備品のひとつオムライス

クローバが鬱の字ほどに込み合える

たんぼぼの寝息が漏れる絵本かな

青空ノゴキゲンヲ聞ク糸電話

六月の雨を惑わす筆記体

きみの手の中で羽化する夏の王

夏蝶はこれから影になるところ

噴水の未完成なる叫びかな

夕焼を見るより浴びて立ち尽くす

世紀末的完熟ノ大西日

月冴える千のナイフを花束に

月光のアンモナイトを巻き戻す

蜘蛛の囿は風の路線図海光る
水汲みに父は銀河へ行つたきり
底無シノ秋晴深呼吸即死
木枯しのままでホームを転げ落つ
讚美歌の埋めきれない冬星座
極月の月の寝袋あり孤島
淋しさのこす擦れ合うとき雪は降り
寒林にあり永遠の忘れもの

○対馬康子奨励賞

福井県 松原藍夏

蓮の花すべる分泌液の池
秋風の吐息真白の布汚す
融けてゆく蠅を愛して春を待つ
沈丁花泡の卵に火を点す
金木犀喉を塞いでいる静寂
片足を失くしてもなお百日紅
藤の花山積みになる収容所
切り取りし桜のからだ血を流す
指切りをしよう燕は帰らない
極楽で身を焼いているのは銀杏
炎天下眼よりも紅い紅い腐臭
差し伸べたその手で千切る鼠の尾
ほおずきを喉に隠して独りきり
秋雨に滲んで二度とは読めぬ文
紅葉が染みて窒息するバケツ
きりきりと痛む胎児よ臍月
鈍色を舌で転がす彼岸かな

牡丹雪動悸息切れ眩暈など
柳より滴る緑泣き通し
溜め息の果てに十五夜お月さま
熟れ過ぎた太陽の色乳腐る
群青の月が溢れる胃に椿
千代紙を汚して融けるさくらんぼ
麦秋を泳いで白い水を飲む
二つ目は殺さずにおこう紅柘榴
我々の寂しい夜明けに百合を焼く
栗の香に胸破られて血を孕む
追いつけぬ菖蒲の空よ爪を剥ぐ
粉雪の空に赤い花ひいふうみい
灰色に光るナイフの背の鱗
くすぶつた灰を飲み込むほととぎす
肺病みの黒目にペンキの鱗雲
お終いに野良猫子猫蟬の羽
引き出しに仕舞ったなりの春の風
傾いた夏を引き留められぬ雲
半熟の満月を受ける秋の海
次に来る季節の匂いに泣く晩夏
降り積もる乾いた砂かと秋の雨
干乾びた向日葵の中生き残り
豪雪に美しい黒粹の葉書
逃げ道に敷きつめられている桜
蟬ひとつ筆るつもりのないからだ
捕らえたと思ひ違いし薄の穂
空隠し忍び笑いの闇さくら
濡れ鴉足元に散る血は椿
嘘ばかり連ねて寝かす麦畑
春の宵掴んでは放す魚の尾
指先に唐橘が染みている
生きようと思ひ直して雪を食う

宵の月一途に昇ってゆく水仙
焦げ臭い髪に寄り添う天の河
彼の香を体内に残している九月
あの青は何と言う名か揚げひばり
芥子の花からだに溢れる生誕日
ひよひよと椿を呼んで鳴く廊下
幼子と同じ記憶の白い梅
草苺涙の雫も赤くなる
夜が白む湿った皮膚で蜜柑狩り
左耳に地鳴りを抱えている泥鰌
赤子から絶望を教わる蟬の声
秋深しとろとろと流れる静脈
死にかけた眼に映るストープの薬缶
臍の緒を虫だと告げられ吐く五月
書き方の手本を破るもみち降る
白昼夢流れ出る汗蟬時雨
空腹のちよちよ千鳥雲を食む
夜が明ける溺れてしまいたい櫻貝
さよならのもみち囁く君だけと
びりびりの雪見障子と猫と寝る
恍惚に窒息寸前の花吹雪
夢を見た枕に残る春の爪
ガソリンの味の晚餐もう二月
来た道を戻れないまませりなすな
雁が音や滲んで見えぬ万華鏡
束の間の朝粥の中に冷たい秋気
明け鴉泣いて集める銀杏の葉
振り返る鴉の声を聞かぬ海
他人とは関わりあえぬ九月かな
故郷など忘れてしまったと云う燕
紫煙とは本当なのだ気付く秋
臍の緒を舐めて過ぎ行く彼岸かな

夜汽車から見ている眩しい夢の菊
水仙に毛穴塞がれ見る浄土
恍惚の中にひとひら牡丹雪
憧れは遠くに残る秋雨の夜
墮とされた小鳥の眼には入道雲
死んでいる魚の鱗から枯葉
白薔薇に身を任せようマツチ擦る
冷たいと思うのは勝手雪積もる
胸に嵐吐いて飛び散る曼珠沙華
八重桜動けず這い回る夕べ
秋雨や自らの重さに不具になる
死にたいと梅桃桜数え唄
灯籠が沈んで安堵する彼岸
北風に骨の欠片の置き土産
思い出のあけびが黒ずむ夜明け前
味噌汁の中でふやけている睡蓮
春の野に一陣の風雲帰る
諦めて火傷の指を噛む楓
帰れずに息を吐き出し踏む時雨

○坪内稔典奨励賞

東京都 神野紗希

起立礼着席青葉風過ぎた
魚類凶鑑伏せたるままに薄暑かな
弓道場翳りて桐の花高し
葉桜のサイドミラーのさようなら
青蔦や第二理科室星の地図
常盤木落葉今なら水面歩けそう

麦の秋こんな隅っこにまで風
麦熟れ星お面のようなお面売り

バスにひとり降りてもひとり螢の夜

黒人のそつと開きし手に螢

夏暁のクレタの壺に丸き艶

昇りたての月の色した熱帯魚

虹ほどの言葉は見つからぬだろう

不等式解けず夏木立の中へ

直線を引けぬものさし桜桃忌

カラコルム産のラムネと言われけり

菩提樹の花や永世中立国

ゆすらうめ姿勢の悪い警察官

百合の花左臀部に青き痣

ゆるやかに海月の剥けてゆく真昼

青梅雨や日本語構造論概論

水音のする方に君合歓の花

天井のしみ顔となる半夏生

百日紅眉毛の太き犬と会う

座布団をはたき差し出す星祭

首のない男とつづくオクラかな

新宿や歩幅大きく鷗外忌

夕立の匂いの洋書貫いけり

熱帯夜アルファベットマカロニのQ

バナナ剥く日付変更線赤し

革靴を汚して万緑を出で来

追伸に本題を書く暑中見舞

独り言増えて青紫蘇ドレッシング

玄関に見たことのない白日傘

白玉や言わねばならぬことひとつ

地下鉄の駅に飼わるる鰻かな

風鈴の買われようとはしておらず
こんなにも着崩し金魚掬いけり

また一人降り短夜の都営バス
雲の峰高架下には秘密基地

泉より上がりし踝の白さ

ひきだしに海を映さぬサングラス

短夜のBARゴーギャンというお酒

星涼しバス揺れるたび触れる肩

黒南風や柵の向こうに夜の海

ごめんねの夜より青い水中花

教室の隅にビー玉晩夏光

カンバスの余白八月十五日

プリントを抱えひぐらしの廊下

朝顔の実やペディキュアは海の色

頬つぺたをひっぱたかれて天高し

からっぽと言いかたつぽになる九月

ドライブの帰りは無言つづくし

重陽や水底に金色の鍵

秋潮の香に車椅子湿りけり

草の花閉まりの悪い用具入れ

青蜜柑困ったように差し出せり

杏ちゃんの黒いマニキュア小鳥来る

曼珠沙華を失くしたような顔をして

咽頭の腫れおり野菊咲いており

水澄むや宇宙の底にいる私

数えてはならぬ花野の遺留品

田んぼには昼の足跡夕月夜

月代や机上に広げたる海図

マウンドにピッチャー一人無月かな

寝待月素振りの音の始まりぬ

呻きとも月明りとも言い切れず

独房の夜流れ星海に落つ

旋律のごとくに柘榴裂けにけり
独白や菊人形の下睫

夕顔の実や耳たぶの熱くあり
長き夜の都庁から見るへりポート
牛膝学校やめてそれつきり
左官屋に虎の入れ墨花カンナ
鬼灯や出来ぬ約束してしまふ
中華街にて枸杞の実を拾いけり
月明の昆虫標本を抱く
真実の口に触れ来し秋の蝶
海に札幌紅葉の艇庫から
寂しいと言ひ私を罵にせよ
蓑虫になる思ひ出になる前に
お帰り放送ひんやりとリノリウム
鈍行の窓ぎいと上げ冬隣
戦わずして傷を得し小春かな
教室の冬日の匂い残る窓
目を閉じてまつげの冷たさに気付く
弟の隠し持ちたる鮫のヒレ
厳寒の瞳に海を持つている
波音を忘れぬままに初日記
初夢に出て来ないでと言つたのに
牙ゆる眼にこのまま捕まっていよう
ネット裏手袋の手をぎゅつと組む
頑張れと言いたくて言えなくて雪
溜息さえ白くてどうすれば良いの
白鳥の首のカアブを真似てみよ
砂浜にハンゲルの壇冬の雷
マフラーを巻いて海鳴り封じ込む
人は皆冬の月への窓を持つ
乾杯が素直に言えて風花舞う
黒板に Do your best ぼたん雪

芝不器男俳句新人賞 公開審査会

と き…平成14年11月30日 午後1時～4時20分
ところ…愛媛県県民文化会館 第六会議室

選考委員

大石 悦子(司会)

京都府舞鶴市生まれ。1954年、作句を始める。「鶴」入会。石田波郷・石塚友一・星野麥丘人に師事。昭和55年度「鶴」俳句賞。第30回角川俳句賞、第10回俳人協会新人賞を受ける。現在、「鶴」同人。俳人協会幹事・日本文芸家協会会員。句集に「群萌」「聞香」「百花」がある。

城戸 朱理

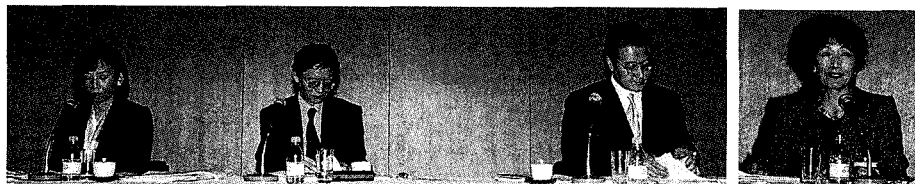
岩手県盛岡市生まれ。20歳で「ユリイカ」新鋭詩人に選ばれる。同人誌「洗濯船」に参加。詩集に「召喚」「非鉄」「不来方抄」(歷程新鋭賞)「現代詩文庫」城戸朱理詩集「夷秋」バルバロイ「千の名前」、詩論に「討議戦後詩」、翻訳に「パウンド詩集」(98年・思潮社)がある。詩・詩論・翻訳のみならず、批評・エッセイ・書評と幅広く活動を展開し、日本現代詩の新世代を主導している。

齋藤 慎爾

京城(現ソウル市)生まれ。深夜叢書社代表、俳人。高校時代に句作を開始、「氷海」主宰の秋元不死男に師事。氷海賞を受ける。1963年深夜叢書社を設立。出版・編集のかたわら、評論、随筆、小説などを執筆。一時中断後、1983年に句作を再開。著書に句集「夏への扉」「秋庭歌」「冬の智慧」「春の驛旅」、随筆「生と死の歳時記」(共著)、「偏愛的名曲辞典」ほか多数。

対馬 康子

香川県高松市生まれ。学生時代に「麦」を主宰する中島斌雄に師事。1984年「麦」作家賞。1990年有馬朗人主宰による「天為」に創刊とともに参加。1994年より朝日新聞国際衛星版「アジア俳壇」選者。「麦」同人、「天為」同人・編集長。句集に「愛国」「純情」、アンソロジー「現代俳句の新鋭」ほか。



坪内 稔典

愛媛県西宇和郡生まれ。高校時代に句作を始め、大学在学中に全国学生俳句連盟を結成。「日時計」「黄金海岸」などの同人活動の後、『現代俳句』を責任編集。1986年個人誌「船団」を編集発行、現在俳句グループ「船団の会」代表。句集に『朝の岸』『落花落日』『百年の家』、評論集に『俳句のユーモア』『子規山脈』『子規のココア・漱石のカステラ』ほか多数。京都教育大学を経て、現在佛教大学教授。

※坪内委員は、公開審査会当日、体調を崩されて欠席されました。ただし、選考に関わる意見は電話にて若干の聞き取りを行い、審査会では当賞の参与である西村我尼吾氏が披露しました。

■予備選考通過者一覧

応募者氏名は選考委員に秘匿としたため、応募作品に番号を付与し、公開審査会・予備選考会ともに、番号によって議論しました。

以下の方が予備選考通過者であり、公開審査会において議論された作品番号の著者です。

作品番号	応募者名	都道府県名	作品番号	応募者名	都道府県名
3	金田みずほ	長野県	65	大屋多詠子	千葉県
12	掛井広通	静岡県	70	足田久夢	神奈川県
13	島本知子	兵庫県	73	森川大和	茨城県
22	杉山久子	山口県	74	関悦史	東京都
30	大曾根葉子	千葉県	80	片岡秀樹	千葉県
32	松原藍夏	福井県	82	山岸竜治	千葉県
33	小倉喜郎	兵庫県	88	明隅礼子	マレーシア
35	齋藤朝比古	東京都	90	相原しゅん	愛媛県
40	塩見恵介	兵庫県	98	如月真菜	東京都
42	中村阿昼	愛媛県	99	秋山夢	神奈川県
43	加藤水野	愛媛県	108	高井一彰	神奈川県
46	篠原俊博	神奈川県	112	中村ふみ	京都府
52	大桃艦人	石川県	115	富田拓也	大阪府
53	三木正美	岡山県	125	佐藤成之	宮城県
60	神野紗希	東京都	127	津田このみ	兵庫県
64	小田涼子	兵庫県			



立っているのは、坪内稔典奨励賞の神野紗希さん

▼大石 大石悦子です。満場一致で司会に決まったということですが、最年長ということで仰せつかりました。慣れておられませんけれども、一生懸命やりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

今日の愛媛新聞の「季のうた」に、芝不器男の「凧や倒れさまにも三ツ星座」という句について村上護先生がお書きになっておまして、今日の審査会をちゃんとやれよと芝不器男さんがおっしゃっているような気持ちになって、ちょっと緊張しております。

お手元の資料番号順に、まず予備選考を通過しました作品を、各委員から選考の弁を発表していただきます。まず作品番号3番について、城戸さんよろしくお願いいたします。

▼城戸 手元の資料だと25歳の方になっていますが、最初に見た段階ではそういうことを存じあげませんでした。例えば「暖味な人と食べている白玉」。白玉というものは、まるで表面張力で一つの球状をなしているような、くつきりとした姿を示しますが、それを何か煮え切らない暖味な人と食べている。この何か異質な状況を突き合わせている様が、清新なフレッシュな感覚の中で17音の中に盛り込んでいるというのが全体的な印象です。また「本当は悪い奴です雪うさぎ」という句も、同じような感覚があるかもしれません。

不器男というのは本名だそうですね。器ではないというのは、論語の「君子は器ならず」から取ったと聞きました。孔子が最高の理想とした君子というものが器ではない。器ではないということかといえますと、中国の易経に「形而上はこれを道と言ひ、形而下はこれ器と言ふ」という一節があります。したがって何か形がなくて捉え難いもの、それは道であり、形があつて我々が手に触れることができるもの、それを器と呼ぶと中国では考えていた。これはギリシアから始まる形而上学あるいは形而上、形而下という区分とは別に、東洋にも同じような思想があつたということだと思います。「君子は器ならず」というのは、何かの容れ物で留まるとはいけないという意味ですから、この芝不器男の名前を冠した新人賞というのは、器に留まらないような方に選考の結果が落ちつけばいいと思います。

この3番の方は、新鮮な感覚をどう盛り込むかという点では注目しましたが、やや定型的、内容の新しさが恋愛をモチーフにしているのが目についたという印象でした。

▼大石 12番の方の「春帽子置けば羽音がするだろう」という句。それから「さくら咲く空よりファールボールかな」という句の非常に感覚の柔軟な、初々しいところを、新人賞にふさわしいと思つて、戴きました。年齢表を見ますと、年齢制限ぎりぎりの39歳の方だったので、若い感覚をお持ちの方です。

それから、「草笛を吹く少年に近づきぬ」。もしこれが女性の作家だったら、少年に対する母性というよりも、もう少し女っぽい感覚というものがこの句に溢れているのではないか。そういうところを大変好ましいといえますか、親しい思いで戴きました。

「観覧車夜空の泉汲んできし」。これは最近、遊園地に大きな観覧車ができて、観覧車を詠った俳句というのがわりとたくさん寄せられますが、多くは高いところから何を見たとか、そこから見える景色を歌っている句が多いんです。しかし、「夜空の泉汲んできし」というところが素晴らしい。

さらに、気に入った句を挙げておきますと、「白毛布わが体温に目覚めをり」。毛布の中で眠る安らぎといえますか、

気がつけば自分の体温なんだけれども、安らかな思いとして冬の夜を眠っている。初々しい感覚かと思えます。最後にも一つ。「物語のはじめの雪の降ってきし」。私の好きな世界なので、一も二もなくこの句を戴きました。

▼西村 坪内先生からご意見をいただいておりますので、ご意見をご紹介させていただきますと思います。

12番につきまして、本日直前でございますが、いろいろご考えの上、この12番の作品も、是非とも自分としてはいい作品であったというふうにお伝え願いたいということでございます。個別の句に關しましては情報がございません。

▼大石 13番に入りたいと思います。

▼城戸 例えば「七月のワックスかけたような街」。あるいは「ポスターの右上垂れている酷暑」。具体的な事物と暑さの感覚というものが、具体的なものや事象によって暑さが形象化されている…そのあたりに注目しました。

▼対馬 ちよつと戻っていいですか。3番と12番にもう一度戻ります。昨日の夜、不器男文集というのを開いてみて、20代で亡くなった不器男というのは、決して未完成でなかったというのを改めて認識しました。やはり、某かの完成度というか、未完成の中の完成度を欲しいなと思えます。

3番は、一度読んだ時に凄くいいなと思った候補に挙がってしまっていて、最初の3〜5句あたりまで詩的でググッと来るものがありました。読み進めていくと、俳句らしいものが現れてきて、この人は余り言葉に溺れないで、俳句らしさが加わった方がいいのではと思っていました。逆のことが12番で、12番の人は余りにも俳句らしいので、逆に詩的なものが入ったものの方がいいのがあると思いました。

12番だと「空蟬の夜は降る星に紛れる」。ちよつと抽象的ですけども。「さくら咲く空よりファールボールかな」は確かに私もチェックしましたが、これは10代の句で十分と思いました。「物語のはじめの雪の降ってきし」は私もいいと思います。こういう感覚と具象性のバランス、自分はどっちに傾いているから、ちよつとブレーキを掛けたぐらいの方が良い句が生まれるのかなということを感じますけれども、如何でしょうか。

▼大石 確かにおっしゃるとおりだと思います。それと12番は「空蟬の夜は降る星に紛れる」と、星だとか宇宙だとか天体を詠んだ句がとて多かったので、それも引かれた理由の一つとして挙げておきたいと思えます。

次に22番。これは「光」というタイトルが付いておりますが、これは齋藤さんからお願います。

▼齋藤 22番は幾つか感心した句があります。一つは「おおぞらのどこにもふれず鳥帰る」。田村隆一に、自分達の空は今時代の漂流物で一杯だ、鳥が一羽巣に帰るのも我々の苦い心を通らねばならない…というのがあります。そういう詩を思わせるというか、「大空のどこにもふれず」という感覚は新しいんじゃないかと思うんです。

▼対馬 第一印象で、この人は詩的なものを自分の中に持っているなという気がしましたけれども、この「おおぞらのどこにもふれず鳥帰る」というのは言い古されてないですか。

▼齋藤 余り俳句ではこういうのを見ません。例えば、囀りだとか鳥なんかの群がっていることを詠んでも、「おおぞらのどこにもふれず」という言い方はしないんじゃないかなあ。それと「うぐひすや少年の舌ざらざらす」。

▼対馬 これは私もとりました。

▼齋藤 永田耕衣に「鶯と父の葉書の荒々しさ」というのが確かありますよね。よくまとまっていると思うんですが。

▼西村 本編につきましても先程と全く同じ状況でございます。坪内先生はこの作品全体について、今日高い評価を下しております。ただ中身、句のどれというのは情報が届いておりません。

▼大石 次に30番の句でござりますが、これは9番から29番あたりまで鬼が出てくるんですね。それもずっと「一月の」とか「節分の豆」「三月の鬼は」というふうな月を追う形で鬼がテーマになって詠われております。これは、今日お休みの坪内先生の甘納豆の句などを思い出して、そのパロディかなと思つて、でもパロディにしては少しくまうかなかつたのかなという感じはしました。やってみたいパターンをここで俳句に詠んでみられたという果敢な態度をチェックいたしました。後半になりますと無季の句が凄く多くなつておりまして、私は有季定型の立場におりますので、ちよつとこれを押すのはやばいかなあという感じはいたしました。

しかし、そういうことを外れて全体に面白いというか、目新しいというか、少し表現は乱暴だけれども、その人のやる気のようなものが見えてきてチェックしたわけでございます。

▼対馬 この30番は、素材に関して言えば、現代を掴もうとしている試みに対して、その意欲を買いました。ただ、ちよつと観念的なのと未完成なのとが混在している。

▼大石 詠み方が荒いというところが未完成感というのでしょうか。

▼対馬 現代の素材をいい句にするというのは難しいですね。

▼大石 本当に難しいですね。どうしても型がありますから、そのところを新しくしようと思うと、素材にまず目についたりすると思うんですが、素材の方はかりにいくとなかなか本当に言いたいことというのが言えなかつたりという。

▼対馬 俳句は、そのものに含まれた全体というか、時間の集約みたいなものがあるので、現代のものというのはやっぱり時間の集約が出来てないので、非常に伝わりにくいんじゃないかなと思いますよね。

▼大石 そうですね。だからパッと見たところ「似たような駅ばかりなり銀座線」というのがあつて、確かによく分かりますが、どこに詩があるのかなというふうな気もします。

それでは32番は対馬さんにご発言をいただきます。

▼対馬 32番は私が推しています。この150人近い人の百句を読んで、誰を選ぶかと構えて読みますので、自然体のだうまい俳句とか俳句らしい俳句というのはどうしても退けてしまうというのが辛いところでした。しかし、自然とそうなるってしまふんですね。今まで見たこともないものを見たいという欲求で選んでいくため、なるべく自分の気持ちに正直なように選んだ中の一つです。

「藤の花山積みになる収容所」とか「指切りをしよう燕は帰らない」「紅葉が染みて窒息するバケツ」にしても、何か気持ちに凄く逼塞しているというか、この人は25歳でまだ若い。そのやり切れなさややる気が拮抗しているところを感じました。何か訴えたいものがうまく表現できていると私は思いました。例えば「ガソリンの味の晚餐もう二月」とか、わりと意表を突くようなのもあつたりして。

ただ百句というのは非常に難しく、どの人もそうですが、百句が百句全部揃っているというのは非常にしんどくて、この人にも確かに未完成のがあります。しかし、まだ粗削りなところもかえつていいなと思いました。

▼城戸 先程の30番と比較した時に、粗削りという点では似たようなところがありますよね。30番の方がいわゆる詩的なものがあるのかという戸惑いの中での作品だとすると、こちらはその戸惑い自体が主題になっているので、もっと具体性を帯びているというか。例えば収容所というふうな言葉が、どういうリアリティを持つのが私にはちよつと分からないんですが。

▼対馬 そうですね。25歳で収容所なんて本当に経験しているとはとても思えないですが、例えばこれが25歳でない句だと思つて、この句だけ出された場合でも、私はいいかなあと思つたんですよ。どうですか。何か説明しようがないな。山積みになるといのが死体の山を連想させるというのがありますけれども。

▼齋藤 30番では2句感心しているんですよ。それは彼岸と此岸を歌っているのね。「大ぼうたんは十億年の彼岸かな」。大きな牡丹というのは不思議な花ですが、それによつてまさしく十億年の彼岸というようなことを考えさせられます。「少年を川面に映し此岸とす」というのは、「川面に映し」だからヒヤシンスのナルシスの伝説を皆思いますが、その少年というかナルシス、自己愛。自分の姿を川面に映しているのが、それがこの世の此岸なんだというところえ方。此岸と彼岸のとらえ方というので、この二つを僕はマークしています。

32番は、記憶と夢うつつという二つに引かれています。「幼子と同じ記憶の白い梅」。なかなかこういうふうな詠めないよね。本当に梅というものの本質に迫っている感じがするんですよ。これも本当に白い梅を見たか見ないか分からないような曖昧を持つているけれども、それを幼子と同じ記憶の持つてくるわけですね。こういうことを詠んだので、この作品では成功しているんじゃないかと思うんです。それから「夢を見た枕に残る春の爪」。これはわりかし技巧的だし。ちよつといいんじゃないですか、この辺の感覚というのは。

▼城戸 春の爪がいいですね。

▼対馬 気がつきませんでしたけれども、いいと思います。それから十億年の牡丹もいいなと思います。ただ、この4句とも好きだと思いますね。とても受け入れられないという人も、この中にたくさんいらつしやるんじゃないかと思つています。少年とか白い記憶とか来ただけでも拒否。言い古されていると言え、言い古されている言葉ではあるかなという気がします。

▼城戸 30番「昼顔は昼のまほろば団地妻」という句がありまして、昼顔というと勿論花を連想するところもあります。ケッセルに「昼顔」という作品がありましてカトリーヌ・ドヌーブ主演で映画化もされています。身を持ち崩している人妻の物語ですね。結句が団地妻ですから、これはかつての日活の十八番みたいな世界で、何か思いがけない違うものを読み手に連想させてしまうことというのが17音だとあります。

作者の意図と違う世界を、読んでいる側が勝手に思い浮かべるといふことも当然あるわけで、あらかじめ拒否してしまふ方がいろんな場面でいるということがあり得ると思うんですよ。だから、これだけ皆さん選ぶものが違うというのが、いわゆる現代の自由詩を書いている立場からしてみると非常に面白いところで、俳句をやられている方なら有季定型という立場の方とそうじゃない方の対立はあつても、もうちよつと何かダブるものかと思つたんですけれども。

▼対馬 全然違いますよね。同じ有季定型を基本としていて。

▼城戸 その分だけ、これから混戦するんじゃないかと思ってるんですけども。

▼大石 この場がですか。(笑)では気を確かに先に参ります。

確かに見たところを詠んで非常に味の深い句ができる場合もありますけれども、重層するところを読んで、そのところを読み取っていく面白さというのをもちと持ちたいというふうに思うんですけども、団地妻だとちよつと……。(笑)

▼対馬 どなたか忘れましたが、イメージを重層さす句がいい句だとどなたかおっしゃってました記憶があります。

▼城戸 エズラパウンドが荒木田守武の「落花枝にかへると見れば胡蝶かな」という句を分析して、これは落ちていく花びらというのと、舞っている蝶々というイメージの重層化によって成り立っている「スーパージョシオン」という言い方をしています。それが20世紀のイギリスで、イマジズムと言われる前衛運動が生まれるきっかけになったんですね。次は33番ですか。

▼西村 33番の「蜃気楼グラスに水を注ぎ足して」「立冬の青空立冬のポールペン」「魚屋に脚立などあり夕薄暑」の三句を推奨句として挙げられております。

▼対馬 この三句に関しては正直なところ余りいいと思いませんが、ほかにチェックした中では、例えば「夏の蝶バケツばかりに集まって」「夏の雲他人のたんす運んでいる」「花束を持たされている冬の星」という方は好みで選びました。この人も、表現の仕方がまだ未完成かなという気がしますが。

▼城戸 坪内さんが選んだのは僕も賛成しかねるんだけど、僕がチェックしたのは「蟬生まれ廊下が少し長くなり」。

▼対馬 これもいいですね。

▼齋藤 いいですね。

▼城戸 僕はこれだけです。

▼対馬 ただ廊下というの、名句でいっぱい素材になってますが、でもいい句ですよ。

▼大石 私も戴いておりますが、非常に俗と言ったらいけない言い方かもしれませんが、余りにも日常的なところが少々読んでいて煩わしいというふうに思いました。ちよつと類型的なというか、そういう印象を持ちました。35番へ行きます。齋藤さんは如何ですか。

▼齋藤 僕は35番では「いなびかり森が大きくなつてゐる」「鶏頭の深きくれなる飛べぬ色」「極月の母や光りしもの並べ」「凍蝶の水を拒みし形かな」「山にゐて山を見てゐる暮春かな」。「いなびかり森が大きくなつてゐる」というのは、非常に素朴な捉え方なんです。この中で一番複雑なのは最後の句です。「山にゐて山を見てゐる暮春かな」というのはちよつと面白いです。

▼大石 城戸さんはこの句はお取りになつていますか。

▼城戸 取ってないですね。「いなびかり森が大きくなつてゐる」は取っていますが、意外と齋藤さんとはダブってないですね。大抵そうなんですけれども。

今、見直してみると、前の段階で何で自分がこちらを選んでこちらを選ばなかったのか分からなくなるところもあります。例えば「玉虫の死が仕舞はれてをりにけり」では、即物的に生命と死というものが物質の中に、玉虫の中に、一体

になつて仕舞われた感覚がありまして惹かれました。先ほどの「いなびかり森が大きくなつてゐる」も単純と言えば単純。稲光によつて森が照らされる。そのことによつて森の全体像が見える。それを大きくなつてゐると表現したところが要だと思ひます。そういう具体的な事物というものに、いつも手を付けている感覚が、この35番の方の特徴です。百句全体が、そういった姿勢で貫かれてるところが魅力だったのではないか。例えば「鮫鱈の曲線濡れてゐたりけり」。これも単純と言えば単純です。鮫鱈が当然食べられるために吊るされてゐるのでしょう。事物というものが、この作者の目から常に触るよう見られてゐる感じが私にとつては魅力的に映りました。

▼大石 私も「いなびかり森が大きくなつてゐる」という、この稲光をどう描くかということ考えた時に、森を持つてきてかういふふう歌う。その驚きが句の裏にある。その驚きというのに読者も共鳴する、共感する。かういふ作り方が、この方の好ましいところではないかと思ひます。「玉虫の死が仕舞はれてをりにけり」では、玉虫の死というものをどう捉えるか。それが大切に仕舞はれてゐる。さつき城戸さんとおっしゃった命の描き方ということになるかと思ひますが、かういふところは大変うまい人だと思ひますね。お上手だと思ひました。

もう一つ好きだったのが「虫の夜万力すこしづつ縮める」。秋の夜の過ごし方というのでしょうか、それが例えとして万力、実際にこの万力という道具を使つてゐるのでしようが、それをこの人の心の有り様を思わせるような形で、このフレーズが大変生きて使われてゐると思つて感心いたしました。私は「山にゐる山を見てゐる暮春かな」といふのは、この「暮春かな」でこの句の答えが出てしまつたような感じがして、ちよつと残念な気がしました。しかし、やつぱりうまい人の句だといふふう35番の作品は思ひました。

▼対馬 35番は、余りにもうまささがさりげなさ過ぎて、見落としたかなと思つてゐます。読み直してみると、確かにうまい人であるかなと思ひます。ただ最初の第一印象でどうして見逃したのかなというのを考えますと、何か見逃すべきものがあつたのではないかと思ひます。

▼大石 うまくて引つ掛かつてこないといふのはあります。言葉とか叙法がそう目立たなくて、深い味わいのある句といふのは、どうしても知らない間に通り過ぎてしまつたりするので。

▼対馬 そうですね。13番の「ちちははが金魚の部屋に座りゐし」なんていうのもチェックしてゐます。1番の句もいゝですね。

▼大石 この13番の句つていいですよ。

▼城戸 一番は「冷蔵庫開けるて海のこと想う」ですね。その二つは私もチェックしてゐます。

▼大石 この一番は不思議な句ですね。

▼城戸 ただ、齋藤さんが挙げられた「山にゐる山を見てゐる暮春かな」について、暮春で結論が出てしまふんじゃないかと大石さんからお話がありました。確かに結論が出てしまふ感じが全体に強いですね。

▼対馬 言い切つてしまつてゐるんですね。

▼城戸 こちらが重層化してゐるものを探する必要はないほど、暗に何か答えが提示されてしまつてゐて。

▼大石 きつと親切な方なんだと思ひますよ。

▼対馬 城戸さんがおっしゃった「鯨の曲線濡れてるたりけり」なんて、そう言われればなるほど面白いなど見直しました。

▼大石 言われてハッとしたりとか、そういう俳句の読み方というのはたくさんあります。

40番の作品に参ります。40番というのは坪内さんがお取りでいらつしやいます。

▼西村 「木枯らしは船の一族神戸港」「弾丸は蜂心臓はチューリップ」「いちにちをもたれてすこす春の風邪」「梅咲いてお城みたいなお父さん」「桜までダリの時計を吊りにゆく」。以上です。

▼城戸 ダリの時計というところ、ドロンと半ば溶けかかったような歪んだ時計ですね。最近ああいうデザインのものを本当に売っています。だから知らなければ何かそういった観念を桜まで吊るしに行くことかなと思いますが、売っているのを見ちゃうと、現物を吊るしに行くようなイメージになったりして……。でも正直言いますと、坪内さんが挙げられたものには、余り私自身が面白いなど思ったものはダブっていません。

▼対馬 応募作の中で「君は」とか「私は」とかを結構使っている人が多かったですね。たった17文字の中で「私は」と入れられただけで、拒否って感じになってしまう。「君」というのもよく10代の人に使われるパターンで、でもこの人は年齢を聞くと31歳なので今更「君」でもないだろうと思いましたが。でもこの

▼大石 「梅咲いてお城みたいなお父さん」という句がありますけれども、この方は比喩の句が多かったように思えますね。その次の「コロツケのような栗鼠いて春の森」「さよならも歌うがごとき夏の湯屋」。比喩の句というのはなかなか難しいと言われています。

▼対馬 坪内さんがいらつしやらないので擁護する人がいなくて可哀相な……。

▼城戸 71番なんか私はハッとしましたのですけれども。

▼大石 それは私も丸しております。いいですね。「百編の寓話曳きざる鯨かな」ですね。

▼城戸 「『る』の滅び」「『る』ほろび神戸震災忌」という句です。79番は、アメリカの作家メルビルが鯨をめぐって長々と記述を費やした「白鯨」という作品が背景にあるのでしょう。71番は、日本の詩が難しいのは欧米の言語に比べて母音というのが貧弱だからだという説を語る方がいまして、母音が減っていくことと神戸の震災を重層化させたところが、詩人の目なんかから見ると面白いんですよ。俳句の世界ではどういうふうに語られるのか見当がつかみませんが、坪内さんがいらつしやらないのはやっぱり問題ですね。

▼大石 本当に残念ですけれども。

▼齋藤 今の71番は城戸さんみたくならえ方だったら面白いんですけども。「ゐ」と「ゑ」で家でしょう。家が滅びたということ。僕はこういうのは余り好きじゃないけどね。「ゑ」も今使わなくなっちゃっている。言語状況の危機みたいなものを、あなたは今考えたけれども、それとは違うんだよ。

▼城戸 これは単純に家という言葉で分割しただけ？

▼大石 これは私も？マークを付けて是非伺いたいと思っていた句なので、もし後で作者がお出でになったらという気もいたします。

▼大石 次に42番です。「でこぼん」という題が付いておりまして、応募作品の中でタイトルの付いている作品と付いていない作品がありまして、タイトルが付いておりますと、どうしてもそのタイトルになった句を中心にした句をもうとする気持ちがあります。

この「でこぼん」というのは「でこぼんを文学論の飛び交へる」という句です。でこぼんという新しい栽培種のおミカンでしょうか、それを間にして青臭い文学論をみんなが戦わせているという光景かなと思いました。

その他、「ふるると鹿の両耳木下闇」「かまきりを放すや猫の丸くなる」「へうたんに脳梗塞のはなしかな」「団栗にしぶきかかれる水飲場」と読んでおりましたら、余り深刻ではないですね。深刻のないところ、むしろナンセンスな句が入っております、それはそれで軽い仕上がりとして、「でこぼん」という題のもとにそういう軽い作品が並んでいて、気楽に読めたというところで、こちらの気が和むような読後感をいただいて、推薦いたしました。

そういう作り方がいいのかどうかというのは別にして、今度の応募作品は、軽やかに歌われている作品が多いような、これは全体の感じでしたけれども、その中の一編かと思えます。

▼齋藤 この73番もいい俳句ですよ。「菜の花の茎の冷たき建國日」。これなんかちゃんと一句完成した作品だと思いますけれども。

▼対馬 私が取ったのは「はなびらをつまむすべすべしてゐたる」。この人は小さな発見がうまい。

▼大石 「冬の蠅こたつ蒲団を上り詰め」。これも発見と言えば発見ですけども、こういうところをじっと見つめることから俳句というのは生まれるんだなあと、そんなことを逆に教えられたような気がいたしました。

43番は、対馬さんが推薦でいらつしゃいましたか。

▼対馬 43番もどうやって説明していいのか。俳句とはこういうものであらねばならないという無意識なマインドコントロールが、私達みんなあると思うんですけども、そこから何か逃れようと、超えようとする意思みたいなものを感じる作品もありました。

稚拙な部分がある句もあるんですけども、中では「くつ紐を結んでもらう雲雀かな」。なんで雲雀が出てくるのか、全く説明の付けようがないのですが、春の野に出て行くために、靴紐を誰かに結んでもらった記憶かもしれないし、のどかな雲雀というのも決してつき過ぎず、でもちゃんといっているという気がしました。

それから「トロッコの真つさらなころ天高し」「歯ブラシの光の春に並び居る」。何かこの人の句には一生懸命さを感じますね。発見してすらすらつと思いつくまま言葉が出てきたところから、もう一つ違うものを表現しようという意思みたいなのが少し感じられました。

▼大石 46番ですが、前半は余り気にならなかったのですが、後半になりましたから凄くチェックしていく句が多くなりました。もしこの作品が、応募規定の中で過去三年間の作品をというお約束があったんですが、もしご自分の製作年代順に沿ってこの一編を削っておられるとしたら、最近作というのがいい感じになってきているのではないかと。将来性というのは、なかなか危険がありますが、そういう先のことを楽しみにしたい作品だと思えました。

チェックしました句は「あの岸へ渡ったきりの虫売よ」「蜻蛉にかむせて帽子やはらかし」。私はどうしても可愛い

句を取ってしまふようなところがあります。それから「ふところのときどき寒しにはとりよ」「馬の息かかるあたりの水柱かな」。季語にちよつともたれかかっているような気もしますが、後半が面白かったということをお伝えします。

52番は対馬さん、如何でしょう。

▼対馬 この人の第一印象は俳句の心得がある人という印象を受けまして、その分、常套に走っているところもある気がしました。しかし、その中でも「初夢や柱のかげにまた柱」とか「暗室や冬の桜を現像す」。俳句のうまさで表現しているなと思いました。

▼城戸 53番は「うららのらら」というタイトルが付いてますが、別にこのタイトルがさすがに全体のコンテキストを示すはずもないなと思つたら、やはりそうではなくて、一番最初に引かれたのは「ものさしで直線引いて冬はじまる」という、ある決然とした感じにまず引かれました。どういう句を書かれる方なんだろうと思つて見つけていましたが、「終楽章めくよ冬野のしづけさは」とか「鳥のやうに両手広げてみても枯野」とか、音楽における終楽章と冬野の静けさというのは、本来はイメージの中でしか重層しないものですが、まるで棒を一本通すように一句一句を提出してきているところが印象深かったですね。

ただ、ところどころで余りにも単純になつてしまふこともあります。しかし、例えば「はるしぐれ京都に上ル下ル入ル」。これは京都の住所というのは、北に行くのが上る、南下するのが下るといふ住所表示になつていますけれども、春の雨の中、春時雨というのは逆に今は俳句にするのは難しい言葉だと思ひますが、逆に住所表示でもつて、それは普段人間同士が道案内をする時でもそういう言い方をしますから、それをそのまま使うことによつて、うろろろしているという様子をまさにこれだけで表現して見せたり、非常に現代的な部分が棒のように真つ直ぐに突きつけられてくるような気がしました。

▼大石 私は京都に近いところに住まいをしておりますが、確かに通り過ぎてしまつていゝ。春時雨もそこに住んでいればそんなものだろうと思つて。そういう近いところにいると見えてこないものもあるのかもしれない。しかし、これは類型があるんじゃないかなと思つたりして……。でも面白い句がたくさんありますね。

▼西村 この53番は本日、坪内先生が推薦しておられる作品でもあります。ただ中身は分かりません。

▼大石 地名を使った「備前備中備後美作さくら咲く」という非常にめでたい句があつたりして、地名を読むのも楽しいことだなあとこのことを思わせられた作品でもありました。

▼齋藤 みんなが挙げなくて僕が感心したのは「蟬しぐれ聞いて百年木のまんま」。それから「茶が咲いて木綿のやうに伊予ことば」「ジャングルジムに四角い冬の空いくつ」「文語より口語の気分です春は」。

▼城戸 これも巧みですよ。

▼齋藤 それから「ラジオ回せば木がらしの周波数」とかね。

▼城戸 「戦前も戦後も兜虫である」というのは何だろうと一瞬思いました。

▼大石 人を食つたような句ですね。いろんな楽しい読みを与えてくれる作品ではなかつたかとコメントしておきます。次に60番です。これは、坪内さんの推薦ですが。

▼西村 坪内先生が推しておられます。まず「起立礼着席青葉風過ぎた」。それから「葉桜のサイドミラーのさようなら」「青島や第二理科教室星の地図」。それからたくさんございますが、8番、9番、12番、15番、21番、22番、26番、48番、52番、64番、71番、73番、75番、97番。以上でございます。

▼大石 城戸さんは如何ですか。

▼城戸 坪内さんが最初に挙げられた「起立礼着席青葉風過ぎた」から始まって、この感覚ですね。「葉桜のサイドミラーのさようなら」もそうだと思いますが、一瞬で何か作られた状況から、その中に潜在的に潜んでいる本質みたいなものを素手で掴んでくる非常に優れた感覚の持ち主だというのが印象に残りました。「白玉や言わねばならぬことひとつ」なんて、これ白玉の姿と言わねばならぬことが一つと言ったところで、一つの円環構造をポンと作って見せたりして非常に魅力的な作品群だと思います。

▼対馬 既発表可ということで、私も俳句甲子園の選者を去年していたもので、この人は最優秀にも選ばれた句も入っていますので記憶があります。ああ、あの子だなというのは分かっています。確かにまだ10代ですけれども、10代の感覚として認めるという、10代だから認めるというところもあるとは思っています。

▼大石 全然べたつかない句の作り方ですね。読んでいて一つも厭味がなくて最後まで。100番に英語が入っておりませけれども、何となく納得して読んでしまったという。読後感の非常に気持ちがいい作品だったと思いました。

▼対馬 ご本人も非常に気持ちのいい女の子でした。ただ10代の終わりというのはこんなに爽やかなものでいいんだろか。10代の終わりというのはもつと鬱屈して、自分達のことを考えても人生が嫌になる一番の年代じゃないかなという気はします。

▼大石 それは先輩としての感想で、私も、ついそういうことを思ってしまうのですが、大変爽やかな作品でした。

次に64番です。これは私が戴きました。この方も多分若い方で、作品全部を見ておりますと、全然気負いのない作品。等身大と言っているのではないかと思います。「初刷を手に父戻る深夜かな」とお父さんのことを詠んでいる。「藪椿母との距離を少しとり」というふうな今度は母が出てきます。そういうふうな父がいて、母がいて、そして自分が居るという家庭の中で、自然に日常を気負いなく詠んでいる。その良さを戴きました。

一番好きだった句というのは、一番と言ったらいけませんね。「宇治橋の貫いてゐる大暑かな」「新しき橋のかかりぬ七五三」。こういう風景句というのでしょうか。始めに家庭内に取材した句を申しましたけれども、そういう句を作りながら、目がちゃんと外に向かつて、きちつとした正統な俳句を作っているところに、この人の将来性を見て戴きました。

よろしいでしょうか。65番に行きます。

▼対馬 65番を選んだのは2番とか3番。それからずつと挙げれば6、13、34、37、42、68、99と選びました。この人は26歳ですが、俳句の格というのがあるなという気がします。「海鳴に征矢の音を聞く大旦」「護摩の炎に揺るぎも見えぬ去年今年」とか、俳句の枠からどう出るかというのは、今後の課題としてまだ残されているかもしれないけれども、若い中では俳句の形という掬えどころの表現も含めてでき上がっている人だと思いました。

▼大石 堂々とした句ですね。

▼対馬 そうですね。

▼齋藤 印象として面で見ると漢字が多いんですね。でも一句一句の姿はともじっくりしていますね。きりっとしているというか。

▼対馬 それをどう評価するかですよ。じっくりしていますよね。

▼大石 お若い方ですか。

▼対馬 26歳です。26歳にしてはしっかりしている。

▼大石 でも26歳にしてはと言うと失礼かもしれませんね。

▼対馬 失礼ですよ。芝不器男さんだってもう堂々と……。

▼大石 そうですね、本当に。これは褒め言葉です。そのようにお聞きくださいませ。
次に70番です。如何でしょう。

▼対馬 この人は逆に39歳なのに形はまだまだなんですね。まだまだという言い方は良くなかったですね。別の表現方法というか。でも何かしたいという意欲が感じられるというので選びました。例えば「残酷なオペラがあった去年今年」。これはちよつと陳腐かな。あと「ケネディーの撃ち殺された夏に生まれ」。これはちよつと映画の題名みたいでいいかなと思つて。

▼齋藤 映画の題名にはちよつと長くありません？(笑)

▼対馬 それから「朝風呂にキリストの顔浮かびをり」。やっぱり独自性を自分なりに追求しているところが見られました。「柔らかな青空を着た秋が来る」とかね。「机には手紙のやうな食べ残し」。やっぱり前に推そうと思つたらその人らしさというのを……。さっきの一つの俳句の形ができていてというのもその人らしさですし、こういう抽象性で押してくるのもまたこの人の形なんです、この人は意欲で取りました。

▼大石 齋藤さん、この方の作品に、行分けの句が一つあるのですが。こういう試みは如何でしょう。

▼齋藤 これはちよつと中途半端かもしれませんね。何のために一句だけこうしているのか。私はちよつと意味がないかなと思います。この作者にとつては意味があつたんだと思いますけれども。この一句だけそうすることに意味があるのか。この人は間隔を分けているところもありますし、表現方法もいろいろ試みているんじゃないかと思つています。

▼大石 次に73番ですが、これは私がチェックさせていただきました。全体に軽いというか、軽々しいというのではなくて、やっぱり軽快な良さ。それは一生懸命俳句を詠んで、軽快にいつているのがうまいといったのかと思つていますが、軽いというのがナンセンスの方になつていて、それもまた良しというやうな感じ。建国の日のココナッツミルクティー」。この句が何でと聞かれると困りますが、何かいいなという感じ。意味がそんなになくて、心に響いてくるものというの、音韻的なことがあるのかなという思いがします。9番の「紫丁香花ソファに倒れこむ」。これだつて紫丁香花というのライラックのことですね。リラとも言いますが、紫丁香花と言つて、この漢字が当てである。こういうところにこの人の俳句を楽しむ姿勢が出てくるのかと思つたりしました。そんなに難しい句ではないんですが、印象が良

かったというところで戴きました。

次にどんどん行かせていただきます。74番はお手元をご覧くださいまして、片仮名表記の句になっておりまして、読む方にも覚悟を迫っているようなそういう印象がありますが。

▼齋藤 全部の応募作の中では一番異色作だし、それから何か、とにかくある世界を作ろうとしているよね。僕は「地下ニ亡父ニ磨キコマレシ」(鐵ノ處女)、「眞青ナ文盲ノ魚飛ビ交ヘリ」(君トナラトモニ殺セル青イ鳥)、「大宇宙ヒトノモノ喰フ音ニ荒レ」(血血血血血血血血血血血)、「魂トイフノモ寄生蟲デアラウ」。でも百句のうちで、これだけあったらちゃんとこの世界を作ればいいんだけど、完成された作品というのかな、7つか8つぐらいしかないんですね、全部で見たところ。ただこういうのは分かるんですね。これは年齢は若い人でしょう。何歳なのかな。

▼対馬 33歳ですね。この片仮名にする表現の意味というのは……。

▼齋藤 僕は余りそれは考えなかったけれどもね。

▼対馬 片仮名で読みにくいので、考えながら読むというメリットはありますけれども。

▼城戸 漢語的な印象を当然受けるわけですから、言ってみれば命令的な印象というのが、まず前提で立ち上がっていると思います。その上でこの作品に関して言うと、齋藤さんがおっしゃったように、まず百句でもって一つの自分の詩的世界を立ち上げようとしているという点では、私自身はこの150を超える応募がありましたので、そういう試みももう少しあるかなと思っていました。はつきりしていたのはこの方だけでした。まずその点を評価しました。

ただ問題が、ここで展開されている世界というのは、ある意味ではかつて洪澤龍彦さんや種村季弘さんや、そういった方々が展開された、旧来は異端とされていたものの、それが何か人間の生命の根源であるエロスにどういふふうに関わってくるかという主題に則ったものだと思います。それを百句でもって実現しようとしている。そこまでは大変分かります。しかし、一句で見えますと、俳句として立ち上がっている感じがしません。

だから例えば何番目のでも構いませんが、例えば10番目の句と見ると、その句が一つ前の句あるいは一つ後の句と互いに寄り添うようにして出来上がっている部分がありまして、それが連作的な作品を作った時のどこか弱さにも繋がってくる。ですから、核を選ぼうとすると、いい句と悪い句のを選ぼうとすると、思いのほか選択に困る。同時に、もかかわらず百句でもって一つの世界を作り上げようという力技は、どこか驚嘆させられるところがあるという非常にアンビバレンスな感覚を抱きました。

▼対馬 決して無視はできないという中の一つでした。

▼城戸 詩人の立場で言うとき非常に分かりやすい作品に逆になるのですが。

▼対馬 どう思いますって城戸さんに聞いたら、いや、これは内容は古いですよと言われたので、ああ、そうか、そんなんだって。

▼城戸 ちよっとこの主題自体は……。

▼対馬 主題が古いつて。

▼大石 それは詩の方から言っていること？ 文学的にも？

▼城戸 いや、決して。

▼対馬 古臭いということではない。

▼城戸 ええ、それとは違います。ただ、どこかでもう既に見た感じが、既視感があるところがあります。齋藤さんが挙げられている100番目「魂トイフノモ寄生蟲デアラウ」って、これが一番最後にくるところはあります。齋藤さんを作った場合には、それはある種の結論であるわけですけども、魂という一番貴重で語り得ないものが、こういう連体に対しての一つの寄生虫であろうという姿勢は、むしろ肉体の中に本質があるんじゃないかという提言なわけです。それは言ってみれば、ジヨルジュ バタイユというフランスの思想家が探ったような、いわゆる人間の性の根源としてのエロチシズムへ、どう言葉の触手を伸ばしていくかという試みだと取り敢えずは要約できるところだと思います。そのこと自体は別に古いというふうには非難されるべきものではないのですが、ことさら目新しさはないところはあるかと思えます。

▼大石 この人が百句で書こうとしている異次元というか異空間というか、それをアピールするために普通の平仮名ではなくて、片仮名のこういう表記をされたのかと思います。これは百句一連でもって読み取るべきものであって、そういう意味で非常に関心を持って読みました。

せっかく百句という場が与えられて、その中で自分が一番言いたいことだとか、全体で言うということも必要ですね。最初から気になっていた作品です。大変読みにくかったのですが、読んでみると西洋の物語が背景にある。それが非常に激しい言い方で書いてありますので、どっちかという劇画的な表現というか、そういうところでお若い方はきつと我々よりももつと抵抗なく、こういう情景というのを自分の中にイメージとして持たれるのではないかと思いました。私はこの作品は好きでございました。

▼対馬 すみません。勉強不足ですが、この漢字、片仮名の俳句というのは他に作っていらつしやる方はいますか。

▼大石 どうでしょうか。今度の作品の中にも一、二句そんなのが混じっているのがありませんでしたか。

▼対馬 これまで前衛と言われた人達の中では……。

▼齋藤 「未定」とか「豈」とか、ああいう若い連中のは多いです。

▼城戸 夏石番矢さんなんかも。

▼齋藤 一冊丸々それで作ったのがある。

▼西村 正岡子規が漢字と片仮名でたくさん作った。

▼齋藤 マクデブルグの館というのは、東ドイツにある古い、今もまだあるんでしょうけれども、エルベ川のほとりの古都なんです。その館という架空の場所なんだけれども、こういうのは、短歌では塚本邦雄とか春日井建なんかがよく作るわけですね。だから彼が架空の現実とは違う異次元のこういう世界。この館に僕らを十分引きつけていけばいいんだけど、余りあれなのね。でも「君トナラトモニ殺セル青イ鳥」。この青い鳥というのは幸福の象徴だろうけど、それを殺そうということであって、とにかく今の秩序意識とか、そういう今の白昼に通用するような道德観なんていうのは、みんなここでは倒錯しているかな。

▼城戸 倒錯しているんですね。

▼齋藤 でも、こういう世界を若い時はどうしても作りたがると思うんだよね。思う存分、自分の夜の部分というか、暗黒の部分、無意識の部分をまさぐっていくということは、結局この人は現実絶望していて、例えば28番なんていうのは本当に文明批評だと思っただけです。「大宇宙ヒトモノ喰フ音ニ荒レ」。普通、荒れというのはなかなか言わないよね、荒れるということ。宇宙がとにかく人の飽食のために滅びていく。館で人間の本能のおもむくままに展開する。こういう世界を歌うということは、やっぱり現実に対する拒否反応。今の時代を生きられないという思いが、こういうことを夢想させるわけだから。ただ十分にこの館に僕らを酔わせるまでいかないんだよね。

▼城戸 できればもっと十分な迷路を作って、十分に迷いませてほしいというところですか。

▼齋藤 ええ、そうですね。

▼大石 登場人物というのを追っていきますと、わりと筋書きが見えてくるような感じがしました。面白い人がたくさん出てきて、それがみんな、このおぞましい情景でもって描かれている。旧字、旧仮名で凄く凝った作品ということでしょうか。こういうことは俳句の中でもできるということも、楽しいことだというふうに思いました。

ではこの世界から逃れまして、次に80番です。齋藤さん、どうぞお願いいたします。

▼齋藤 僕はかなり共感する俳句がありました。最初からいくと「逃げ水は不幸に真直に走る」とか、「緑陰やそれは深爪する昏さ」とかね。

▼城戸 52番がいいですね。

▼齋藤 これはいいね。「月光を容れる容器として裸身」。それから「夾竹桃二十世紀は負の遺産」というのもいいですね。それから軽いようだけれども「かりそめの名で呼ぶひとと夜長かな」というのは非常に好きですね。こういう物語性のあるのが。それから「揚雲雀知る世界内存在と」。これは世界内存在なんていう詩は、ハイデッカーみたいで難しいけれども、揚雲雀にぴたり合ってますよね、無理なく。揚雲雀をこんなふうにして詠んだ人は余りいないと思うし。

▼対馬 この人はうまい人だ。中級者から上級者というか、作り慣れているなあと思いましたが、作り慣れている分、ちよつと新鮮さが訴えてこなかったもので……。どうですかね。

▼大石 なかなか難しいところですね。

▼対馬 そうですね。

▼大石 それでは82番は坪内さんですが。

▼西村 変更です。ご参考までに、かつて挙げておられた句だけを紹介しますと、4番、16番、23番、24番、35番、88番。以上です。

▼大石 お出でになったらお尋ねしたいと思っていたのが、58番の五行になって書いてある句がありますね。普通に読めば「すなごけいをにやんだこれはと見てるネコ」となると思うんですが、それを五行に分けまして

す な

どけ いを

(にゃんだ? ……これは)

と見 てる

ネ コ

超絶短詩説いうのを書いてる人がおられるんですが、どうもその手法を俳句に持ち込んで、こういう面白い書き方をされている。超絶短詩というのは、言葉は短い感動詞とか感嘆詞ですね。「あ」とか「お」とか。そういうものを言葉の中から一文字出して、二文字でも構わないんですが、この場合だって「ネ」とか「な」とかというのが感動詞になつて、あと言葉を分解していつて、面白さを引き出してくるというものです。そういう、俳句よりも短い詩を書いている人がおられるんですが、これは俳句をそういうふうに分解した実験作かと思つて、それでもこういうふうにしてしまうと随分長いという感じがしました。坪内さんがお出でになつたら、ご推薦の弁の中で伺つてみたいと思つておりました。

▼聴講者 これは形でしょう。例えば42番は蝶々の形で、58番は砂時計の形。「これは」の上の……は砂が落ちてるところ。

▼大石 なるほど。気がつきませんでした。

▼対馬 なるほどこういうフォルムなのね。

▼大石 言葉を視覚的に表している。

▼対馬 これが蝶々のフォルムなんだ。

▼大石 なるほど。そういう仕掛けがあるとは知りませんでした。

▼齋藤 こういう詩の書き方自体は、20世紀初頭にフランスのギヨーム・アポリネールが始めたやり方で、その後アメリカのE. E. カミングズという詩人が大変巧みに展開しました。俳句のように17音でやるということなかなか大変だと思うんで、砂時計の形であれ、蝶々の形であれ、よく考えられたなと思います。

▼大石 その意欲というか、面白いものを見せていただきました。

▼対馬 アジア圏の海外から三編応募があつて、88番を読んでいて、そのあたりの句だなというふうに思ひまして、私もタイに住んでいたことがあつたので、分かるということでごチェックを入れました。この方はアジアに住んでいて、そこで作っている希有な存在の一人であると思います。まだ若いですし。

一番好きなのは「泳ぎ来て空青きことばかり言ふ」。マレーシアに住んでいるというところで独自性はありますが、そこを離れたところでも、十分この人の詩的感覚というのがそれなりにあるということを確認した句です。それと「藤の花まつすぐにあり雨もまた」。ちよつと俳句の形としては古いですけども、十分言い尽くして余りある句だと思いました。

▼大石 98番です。対馬さん、如何でしょうか。

▼対馬 この人も作り慣れてるなという気がして、最初はちよつと拒否反応がありました。選ぶ上において、じゃあ作

り慣れているからこつちへ置いとけではやっぱりよくないなと思ひ直して選んだものです。ねぶたの句にしても、それぞれちゃんとうまくいつてる。うまくいつてるなというのが一言の感想ですね。ただそれ以上、どうしてもこの人というところ。これがこの人らしさなんだなという気はします。

▼大石 うまくいつているというのは最大の賛辞かと思つておりましたけれども。

▼対馬 そうじゃない。うまいんですよ。

▼大石 うまいつて言われて、余り喜んじやいけないということかもしれないね。

78番の「いずれの御時にかあらむパンの黴」なんて、パンの黴が恐縮しているだろうなと思つて、こういう遊び心のある方なんだなと思つて読ませていただきました。

では99番へ行きます。99番も対馬さんがお取りですが。

▼対馬 一言で言えば、上級者というか、たくさん作っている人ですね。何が新しいのかというところを突き詰めて、こういう作り慣れているのを排除してしまつと、新しさを見直す危険性もあるかなと思つて、やっぱり予選には残すべきかなと思つて選びました。

選んだ中では、さり気ないんですけども「枝先の椿は遠く落ちにけり」。これは如何にも俳句ですが、百句はちゃんと考へて揃える力がある人じゃないかな。安定した力というのを感じましたね。ただその分言葉に手垢が付いてしまふ恐れがあるので、どうですかね。例えば「青芒ぶつかりあうて傷つかず」というのはチェックしました。

▼大石 本当に破綻なく、うまく作つていらつしやるといふ感じですね。108番。ずっと対馬さんのご推薦が続きます。

▼対馬 これは99番と逆の形で、凄じ言葉とものを構築して作つているというイメージでした。「寒梅や災禍の渦に蜘蛛の降りる」「わが母を蚯蚓に喰はす浅き墓」なんていうのはちよつとおどろおどろしいかな。「天蓋に黙した音楽の氷河」。この人の句は、好き好きがある部類の句です。私の中でもそうですけれども。凄く前衛的な分かりにくい句と凄じ有季定型の形がしっかりした鍛練を積んできた句という両方が好きなんです。

▼大石 いいものはいいところですね。ありがとうございます。次は112番です。

▼齋藤 僕がチェックしたのは「浮雲と名づけて育てし糸瓜かな」。後は余り関心ないなあ。

▼大石 浮雲の句ですね。これは面白かった。これは私も大きな丸を付けているんです。この句はいい句ですね。

▼対馬 私がチェックしているのは「春の雪ぶつかりし歯の硬さかな」。ああ、分かるなあという感じですね。

▼大石 それから「イースト菌働いてる文化の日」。これは坪内さんもお取りですが、さり気ないところで文化の日というのがよく効いているというふうな気がしました。

▼齋藤 「花粉症墨東綺譚立ち読みす」ということで、永井荷風が入つていて、それから「北窓を開くこゝろを愛読す」とあるでしょう。これは夏目漱石ですが、こういう場合は括弧した方がいいんじゃないかということ。そして、僕だったら、括弧をしなければ「北窓を開くこゝろを」まではそのまま、「愛読す」じゃなくて、例えば「愛惜す」とい

うふうにする。そういうのは好きなんだよね。つまり北の窓を開く心を、そういう行為を今やっている自分をどこかで哀れんだり、いとおしんでいるんだとすればいいと思う。ただこれを、夏目漱石の「こゝろを愛読す」というだけでは面白くない。

▼大石 いいアドバイスをいただきました。
では次は115番。

▼齋藤 これは全応募作で一番チェックが多かった作品です。全体から二、三編を挙げるといったら、この作品なんかが入ります。どれを挙げたらいいかなあ。こういう俳句を作っている人というのは、寺山修司がむしろ近いかもしれませんね。

▼対馬 「胃の中に雪降る如き訣れかな」って、ちよつとぐぐつと来ましたね。

▼齋藤 「銀漢にひとさし指は溺れたり」というのは寺山さんにもありますしね。

▼対馬 その模倣の域からは出ているんですね。

▼齋藤 これはいいと思いますよ。僕には「虹に列しひとさし指は滅びけり」というのがあります。寺山さんにもそういうのがあるのね。「秋風やひとさし指は誰の墓」というのかな、確か寺山さんのは。ひとさし指は溺れたりとか滅びけりというのは、わりと生まれているんですね。

▼齋藤 今までのをずうつと見てきた中では一番詩的じゃないかなあ。「空蟬が廃墟のやうに思はれて」というのもそうだしね。

▼対馬 驚くことに23歳ということ。

▼齋藤 ああ、そうなの。

▼城戸 例えは「何時よりか肺を彷徨ふ蜚かな」のように、単純に物と心と分かれてないんですね。どっちかだと思わせると、それが繋がっているような巧みさがある。それは「月の夜や心に貝の渦見えて」だってそうだと思うんだけど、一番個人的に気に入っているのが「春満月吊り橋に死の遊びせむ」。どこかで禍々しいイメージを持ってきて、ある明るさを伴っている印象がありますね、全体に。

▼対馬 逆に私は何かその暗さがいいなあと思いました。

▼齋藤 「春満月」がいいよね。ただ俳句の方だと、詩の遊び過ぎというのが齋藤さんとか中村苑子なんかとか随分あるんですよ。手足の遊びをするとかね。でも「春満月」までやらないのよね。僕は「春満月」はいいけれども、「吊り橋に死の遊び」だったら余りにもつき過ぎで……。

▼城戸 それは常套的になり過ぎる。

▼齋藤 「春満月」に「死の遊びせむ」はいいんだけど「吊り橋」まで言うことないだろう。「吊り橋」にはどうも引っかけられます。

▼対馬 この人は現実と心の中の融合がうまいですよ、本当に。

▼齋藤 だから「雪降る如き訣れかな」だったら「胃の中に」でしょう。僕はこっちの方がいいと思うんですけども、

「永別や扉の奥の濼」というのがあるよね。これも同じようなことだけれども、よくできているよね。

▼城戸 かなり潜在的に大きなものを感じさせてくれる人ですね。

▼大石 素材にも好みがあつて、黒蝶、蟻、空蟬、蝙蝠など。そういう中で、自分の世界を、読者が「ああ分かる」という世界に描かれているような気がします。私もこれは大変好きな句で戴きました。

▼齋藤 「空蟬や暗紅の都市廻り」なんていいですよ。僕なんか自分がこういう世界を作ろうとしているから、こういうのには脱帽しますね。

▼大石 「ただならぬ闇にあやめの群がれり」なんて、ちょっとエロスというんでしょうか、お若い23歳、そういう方がこういう世界を。

▼対馬 いつの間に身に付けたのという凄いテクニクがありますよね。

▼大石 テクニクが目立つところがありませんか。

▼対馬 それはこの人の場合は鼻につかないですよ。だからやつぱりうまい。

▼大石 そうかと思うと「槐太忌の傘にかそけき雪降れり」なんて、泣かせどころもちゃんと心得ておられるし、なかなかの作者だと思いましたね。

次に125番です。125番は齋藤さんをお願いしてよろしいんでしょうか。

▼齋藤 前の作品も最後に二、三編残したいものと言いましたが、これもそういう作品なんです。最終的にどつちをどうするかということは後で。今も迷っているんですけども。まず「紫陽花にまだ未使用の恋がある」。それから「空前のエクスタシーの曼珠沙華」「夕焼けが見たくて放火したという」「顕微鏡視けば冬の星座の巢」。これは僕は好きですね。それから「白骨と化すまで月光を拾う」。「名月の沸騰点へ石を積む」もいい。「海月透くように呼吸する未青年」。同じ月光というのを随分歌っているけれども、51番もそうだね。「枕辺に積む月光」とか凄く好きなのがあります。

▼対馬 タイプとしては115番と似てますよね。

▼城戸 似てますね。

▼城戸 私も実はチェックした句が125番に大変多いんですよ。今、齋藤さんが挙げられたように5、9、34、35、51番といった句が印象に残りました。

一方で、こうやって公募の形で百句競争の時に、現代的なものが具体的なものとして、どれぐらい入り込んでくるのか関心を持って眺めていました。つまり携帯電話とか、パソコンのメールであるとか。意外とうなづかさせてくれるものがないか、その中ではこの人の「春はあけぼのピリオドのみのメール打つ」というのは一番できが良かったんじゃないか。あるということを示すわけですよ。これはセンスのいい現代的な風俗をめぐる一句だと思えます。これを除くと先程話し合った115番と同じように、例えば「かたつむり時間の継目をこぼれ落つ」というふうに、いわゆる単純な叙景を超えて何か別の次元というか、我々が普段生きて普通に触れている日常と違う次元を少し覗かせてくれる力技がある一群

の作品だと思いました。

▼大石 ありがとうございます。最後の127番です。

▼齋藤 坪内さんが、今回いろいろ推薦した中ではこの作品が一番いいですね。ただ坪内さんが挙げてないのが幾つかあります。例えば「闇取引にアネモネの花使わるる」「唇を持て余したり春の闇」「薄原二つに割って男来る」「恐竜の背中心びわれ秋日和」。また、僕も坪内さんと共鳴句がありました。「長電話二人はきつと蜚かな」というの。

▼城戸 これは凄くフレッシュな感覚がところどころに見えるのが気持ちいいですね。「吾もまた一人るるるるかいつぶり」。「吾もまた一人」なんていうのは非常に常套的な言い回しでしかないんだけど、この「るるるる」という4音すべてが姿をきちんと現してくるようなところがあって、こういった部分でも感覚が新しいという感じはしました。

▼対馬 そのフレッシュな今時の感覚というのが凄く伝わってきていいなと思いましたが、前にも言いましたように「私」が多くて、そこでちよつと拒否しちゃったんですね。そういうのって気になりませんか。マイナス方式で言うのは良くないのでしょうか。

▼齋藤 17音ですから、やはり語る主体であるとか語られる対象であるとか、私とかあなたとかというのを読み込んでいくと非常に難しいですね。

▼城戸 あなたとか私とか挙げないでしょう。でも僕は歌ってもいいと思っています。でも余り成功したのはいけませんね。

▼齋藤 17音の中で例えば何かを反復するなんていうのは大変なことです。

▼対馬 他の作品でもありましたけれども、同じ言葉を反復したり勿体ないじゃないと思うんですね。

▼齋藤 芝不器男の「あなたなる夜雨の葛のあなたかな」と、これは反復があるわけですけども、ここまでいくのはなかなか大変だった。

▼大石 いろんなお話が出たところで、予選を通ってきました候補作品についてのご意見は、この辺で一応終りにいたします。

〔 休 憩 〕

▼大石 どうもお待たせいたしました。会場の方から少しご意見を伺ってみたいと思います。夏井いつきさん、いろいろお考えになったこととかご感想やらをもし伺えたら……。

▼夏井 ありがとうございます。松山からこういう形でこういう新しい賞が出来たということも大変嬉しく思いますし、皆さんのお話を興味深く聞かせていただきました。

個人的な感想を述べさせていただきますと、百句まとめて何かを主張しようとする意欲作ということも分かりますが、

私達は一句独立という形で俳句を書くということをひとまず目的にやっています。個人的な思いとしては、一句一句がどういう作品として立っているかという視点で決まっていけばいいなというふうに思いました。

また、芝不器男らしい清新なというか、爽やかなというか、希望の持てるような作品が選ばれると良いと思います。何せ一回目ですから。二回目ぐらいに個性的なのが出るのは拍手喝采なんですけれども、一回目でいろいろなものも印象付けられることもあるので。

▼大石 ほかにどうぞご意見のある方はお願いいたします。挙手をどうぞ。

▼名本 芝不器男記念館からやって来ました。「あなたなる夜雨の葛のあなたかな」に近づいた俳句が出るのかな、そういう気持ちでした。それは全く期待を裏切られましたが、今日の選ばれた句が云々という意味ではございません。新しいタイプの俳句はこんなものかなという印象を受けました。不器男のまだ句集に載っていない句に「表笛を吹けば誰やらあわせ吹く」というものがあります。小学生にも分かる俳句ですね。芝不器男記念館で俳句道場をやっております。子供達と一緒に俳句を楽しんでいます。今日聞かせてもらいながら、かなりのレベルの俳句だということが実感です。小学生達と俳句を作るのに、公開審査の先生方のご意見を聞きながら、どういうふうに関後対応していったらいいかというのが、芝不器男記念館長としての私の課題になりました。ありがとうございました。

そして、来年の4月19日、不器男の生誕百年祭を計画中です。是非また不器男の故郷にお出でいただけたらありがたいなと思います。これはちよつと宣伝ですが……。この賞の授賞式もその時に松野町で行う予定です。どうぞいらしてください。

▼大石 来年のことですけれども、是非、参加していただきたいと思えます。

さて、受賞作品ですが一作ずつどういう形で……。口頭で何番という形でいたしました。対馬さんの方から順番でよろしいでしょうか。

▼対馬 最後の一編を残すということで、非常に迷いました。それは選者が将来の俳句に何を求めているかということさえも問われることで、何か新しいものを見つけたくて選を楽しみながらやっていました。

じゃあ何が新しいのか。よく新し新しみと言いますが、川本皓嗣先生の論文を今度「天為」という雑誌に載せていただくことになっていますが、「不易流行」ということを考えました。川本先生はボードレールのことを引き合いに出して「不易流行」ということについて述べられております。変わらない真実の美と今のもの、もっと先のもの、未知の美というものの兼ね合いというのが、果して見出し出せたのかどうかということを考えました。そして、私が最後に一つ推したのが32番です。

他にもいい作品はありましたが、この32番の一連の句を見ると、何か生死というか、生きること、それから死ぬことというテーマ性を底辺に感じたんですね。しかもこの人は25歳ですが、この死という最も困難な、命とか・命というのをもろに出すのじゃなくて、例えば赤ちゃんが生まれた時の喜びとか子供を育てているとか新婚さんの句とかいっぱいありましたけれども、そういうことを排除して命を歌っている、死を歌っているということを感じました。

子規も若くして亡くなりましたし、この芝不器男さんも20代で亡くなっている。死というのは昔の人にとっては本当に

早く訪れたものだと思います。この人は、まだ自分は病気で何でもないだろうけれども、死から逃げないで常に抱えて考えているのではないかなということを感じました。作品番号では7、9、13、15、24、31番。どれも息が詰まるぐらい、自分の中に帰っていく力というか、もしかしたらこの一連の中で見ると「生きようと思ひ直して雪を食う」とか「死にかけた眼に映るストロブの薬缶」とか。もしかしたら本当にそういう体験をしているのかもしれないけれども、そこからまたふと日常に帰った時に「ガソリンの味のする晩餐」がある。ああ、何と虚しいんだ。そういう感覚が私は好きでした。またこの粗削りな部分も完成されてない未完成さを私は推したいと思います。

▼齋藤 百句では、一句一句の完成度が、まあ70句なきや駄目だというのが大体普通だと思います。試験でも大体60点で合格点ですが、それからいくと百句あつたら70〜80句はとにかく一応の水準に達してなければなりません。今回、どのぐらいい取れるかというふうに取って、最大取ったのでやっぱり34〜35句しかないということは正直な話です。結局、完成度の一番多いのから言えはいいのですが、そうすると僕が推すのは115番か125番ということになる。

さて、そこで悩んだんですけれども、先程年齢の問題が出ました。僕は、男とか女とかは全然関係ないけど、年齢というのは考えなきゃならないだろうと思うわけ。最終的に、僕は115番と125番を迷うんだけど、取った句数から言うと、125の方が少し上回っている。ただ年齢からいうと、さつき聞いてびつくりしたのは115番が23歳です。それで125番が37歳。125番の「紫陽花にまだ未使用の恋がある」とか「ダイス振る春の体積はかるごと」。こういうのは僕は非常に好きです。「青春のまつただなかのレタスかな」もいいじゃない。だけど37歳ではそういうのは詠んでももらいたくない。これはやっぱり20代で、10代で詠まなきゃならない作品ですよ。「ダイス振る春の体積はかるごと」。「青春のまつただなかのレタスかな」。「掃除機で吸いとする空よ修司の忌」。寺山修司の忌。これは僕は取らないけれども、こういう未熟な作品もあるわけです。良い作品の数だったら125番なんだけれども、年齢とかそういうことを考えると僕は一位に115番を押しします。

115番の先程触れなかった作品では「葡萄挽ぐ聖痕戻らざる日々を」「曼珠沙華墓の隙間を溢れ出づ」「金雀枝に零るる死者の吐息かな」「葡萄挽ぐ聖痕戻らざる日々を」。「聖痕」というのは23歳でトラウマ、聖痕、そのステグマかな。それが戻らざる日々をと歌っている。葡萄を挽ぐというのは、平畑静塔の「葡萄を挽ぐように教えたし」を踏まえていて、思い切ったことを詠んでいるわけです。それから「曼珠沙華墓の隙間を溢れ出づ」は別にどうってことないけど、なかなかこういうふうにかかない。これは曼珠沙華が墓の隙間を溢れ出たんだろうけれども、逆に墓が曼珠沙華の隙間を溢れたとも言えるわけだしね。これなんか計算しているかどうか分からないけれども、これはなかなかいいと思います。何気なしに詠んでいるけれども。あとは「瓦解して眼裏を発つ蝶の影」。これなんか緊張感が走っていてきちんと詠んでいるし、この年齢でこれだけの作品を作ったということ、今後の将来性を含めて、僕は115番に一票を投じます。

▼城戸 私の場合は気になった句をチェックして、その数が多いものを実はここに推薦作として挙げたわけではないというところがありまして、それは何でしょう。やはり自由詩を書いている立場から見ると、これは良いと思うものが例えば20あるものよりも、もつと何か深く突き刺さってくる一行というものに気持ち動かされているところがあつたのかも

れません。そういった中で、例えば作品番号で言うと53番や60番なども大変気になります。今、齋藤さんに先に挙げられたんで困っているんですけど、私も結論から言いますとやはり115番に一票を投じたいと思います。

先程も論議になりましたが、齋藤さんが挙げられた「墓の隙間を溢れ出づ」も確かに私もチェックしていますが、何か暗さの中に明るさが灯るようなものが常に感じられるところがある。先程も話しました「何時よりか肺を彷徨ふ螢かな」。これなどは人間の生死に関わりながら、何か微かに灯って自分の身体を支えてくれるような、微かな明かりが自分の身体を支えてくれるような美しさがあると思います。

例えば死であるとか、そういった問題を句の中に語るとするのは簡単ですが、そのことが読む人間にとってリアリティを持つのは難しいと思うんですね。ところが、それが何かきちんとした姿を持ってこちらに迫ってくるところがあって、同時にそのことが生きていくことのある儂さを持った姿と見せてくれるように思います。

▼大石 私も今随分迷っております。一番気になったのは、先ほどお話ししましたように74番でした。でもこれは、確かに一句の独立性とかということを考えますと、俳句を作っております側からしますと、面白いことは面白いけれども、アピールするものが少し違ってくるのではないかと感じて、74番は見送りました。

私もなるべく重ならないように思っておりますが、でも好きなのは115番になります。別に休み時間に談合してきたわけではありませんので、聞いていただきたいのですが、選考していて、読んでいて、ああ、これこれというふうな響いてくるのが選考している時の楽しみだったのですが、それが74番に多かったです。その次に多かったのが115番という作品でした。

さつき申し上げられませんが、「垣間見し駅は昼顔ばかりかな」。これは駅の有り様、それも垣間見た駅というのが昼顔だけが咲いているという、この昼顔の象徴するところのものが心に響いてきます。それから「逆鱗に触れては開く火花かな」。逆鱗に触れるという言葉が普通使いますけれども、火花の咲く様子にこういう使い方を、火花の開く様子を的確にとらえているように思いました。それから「雷の夜を風のごと去る曲馬団」。こういう懐かしい心の中の風景というのが出てきております。本当にこの人の持っている世界というものに強く引かれて、さつき年齢のことが言われましたけれども、年齢のことは別に、作品として非常に魅力のある作品でした。大変早熟な作家ではないかと思えます。

もう一つ64番の句。お若い方の句だと思えますが、これもさつきちゃんと言えなかったところがあります。父母を詠んで、自分の周辺を等身大で詠んでいるその態度というのはいやかなり非常に尊いことだと思います。季節というか、季節というか、それに対する態度が非常に良いことと、そこから引き出されるナイーブな感情というのでしようか、それが句の上に無理をしないで出てきているというところで、甘いと言えは甘い、幼いと言えは幼いかもしれませんけれども、この年代の作者としてしっかりと俳句に向かい合っておられる。本当のことを言うと64番と115番と随分迷ったんです。

64番についても少し申しますと、「切符透く胸のポケット柿若葉」「天井に届く古本麦の秋」。それからご自分の体験そのものだと思うんですが、「家庭教師終へあぢさるを貫ひけり」「地下鉄にあじさる抱へ乗りにけり」という、何でもないので、この大きなあぢさるを胸に抱えて電車に乗っている、地下鉄に乗っているその若い女性の姿を、何だ

か涙の出るような思いで読みました。それから「秋の雨ガラスの指輪買ひにけり」。ああ、そうかという感じもします。「病む母に甘柿二つ買ひにけり」「秋の虹上着をかけてくれにけり」。非常に素直な句です。

非常に両極端にあるような作り方とか世界とがあるんですけど、115番の方に一点入れたいと思います。坪内先生のご意見をお願いします。

▼西村 それでは坪内先生のお言葉をお伝えしたいと思います。これは先生がおられませんでしたので事実だけを伝えさせていただきます。坪内先生は12番、22番、33番、40番、53番、60番、127番から選ばなければいけないが……それで自分としてはこの中でも一番若い60番を推したいということでもあります。

▼大石 ありがとうございます。そういたしますと坪内先生は60番ということですか。どういたしましたでしょうか。

▼対馬 三人が115番ということですが、私も確かに115番はいいと思ったんですけども、ちょっと待ってよ。本当にいいのかともう一度問い直してみてください。

▼大石 対馬さんは、いかがですか。

▼対馬 言い古されているとまではいきませんが、どこかで見てしまった俳句ではないかなという不安感があります。新人賞ということにこだわるわけではないですが、未知の可能性と未知の美を自信を持って、私も確かに115番は推していますが、本当にもう一度聞きたいのですが。

▼大石 ここで止まってしまうとか、そういうことではなくて、非常にはっきりした世界というか、この方の世界というのがしっかりでき上がって、不安定なとか不安感を覚えさせるようなそんなところはありませんでしょう。良くできたというか……。

▼対馬 そうですね。不安ではなくて、可能性というのはどうですかね。この人の将来の可能性。このままいったら末恐ろしい俳人になる素質はやっぱりありますよね。どうしても何か見たことがあるという気が拭えないんですけども、そんなことはないですか。皆さんはどう思いますか。

▼大石 どうぞおっしゃってくださいませ。

▼聴講者 自分の経験からいくと、23歳でこれだけの句ができるということは凄いことです。あと五年ぐらいするともっといい句が出るという可能性はありますね。僕の好みでいくと99番ぐらいだけでも、それよりもっと感覚的に素晴らしいところがあります。

▼対馬 そうなんです。確かに感覚的に素晴らしい。確かに最初この全編を読んだ時に、形式的な74番を除いてはみんな何か似ているな。突出していたものはないなと思いました。しかし、二回、三回と読み進むに連れて、115番とか125番は圧倒的な力を感じたんですよ。それは如何ともしがたい。じゃあ何故詩人である城戸さん、有季定型の「鶴」の俳人である大石さん、齋藤さんが共通して115番を推したのでしょうか？

▼齋藤 私の場合は、俳句をやられている方よりも小説家であるとか、詩人であるとかそういう方が友人に多いんですね。最近「ブエノスアイレス午前零時」という作品で芥川賞を受賞した作家の藤沢周と話している時に、彼が凄い俳句を見つけたと言っていますよ。それがどういいう句かというところ「鳥の巣に鳥が入っていくところ」という句なんです。いつもレト

リックに苦心している作家の目から見ると、当たり前のことを当たり前のように語られた時に奇跡のように思っらしい。自分も何度か繰り返し読んでいくと、全体に似たような印象だったものの中から、どうということはないんだけれども、どうしようもなく魅力的だというものがあるのに気づくようになるんですよ。ただ、この115番に関しては客席の方から発言もありましたように、確かにセンスの良さというのは十分感じるんですね。それが一つのテーマを先に立てるんじゃないくて、テーマを連れてきているようなセンスの良さと言ったらいでしょうか。

ただ、一方で定型にまつわる問題として、その感覚をいつも五七五に持っているとはやはり進歩はないわけで、批判性 থেকেから作者がどう持つていくかというのが問題だろうと思います。批判性というのは有季定型か自由律かというふうな問題ではないですよ。より五七五という問題を深く自覚すると言ひ換えてもいいですけれども。

▼大石 推薦作が出ておまして、32番それから60番、115番の三作が候補に挙がっておりますが、手続きとしてケジメということで、挙手による採決をした方がよろしいですか。もう挙げなくていいですか。

▼齋藤 手は一回しか挙げちゃいけないんですか。候補に挙がっているのに二回までの挙手可能で取ってみるのはどうでしょう。32番、60番それから115番で二回までの挙手可能でやってみたらどうでしょうね。

▼対馬 115番は四票入りそうな感じ。

▼大石 結果として……。

▼齋藤 一緒ですか。

▼大石 三作ですから、挙手するのも何か恰好だけのような気もしますけれども、ひょっとして変心ということもありますし、じゃあ取らせていただきます。

―― 挙手による採決 ――

では第一回の芝不器男新人賞は、115番に決定しました。おめでどうございました。(拍手)

▼対馬 一応反対はしましたけれども、115番は選者を驚かす力があつたと思います。

▼齋藤 一体どこのどなたなんでしょう。

▼事務局 それでは発表させていただきます。115番は大阪府にお住まいの富田拓也さん。男性。23歳です。おめでどうございました。

では続きまして委員奨励賞を、よろしくお願ひいたします。

▼大石 各委員の奨励賞というのがありまして、各委員から一作これという作品に対して奨励賞を差し上げることになっております。では坪内先生の方からお願ひします。

▼西村 坪内先生からお言葉をいただいておりますので、奨励賞は60番で願ひします。(拍手)

―― 事務局発表 60番作者は東京都の神野紗希さん。――

▼城戸 これもまた迷うんですけれども、坪内さんが推していらっしやらなかつたら私も60番と言いたかつたのですが、齋藤さんが君は詩人だからこれを推さなきゃ駄目だと強制されて……。 (笑)

一句としての自立性には欠けますが、やはり百句でもって一つの世界を作ろうとしたところを評価します。74番。

— 事務局発表 74番作者は東京都の関悦史さん。男性です。—

▼齋藤 坪内さんがかなり推している、僕も推薦していた127番というのもあって、これは坪内さんと一番共鳴したんだけれど……。

迷っていたけれども、やっぱり125番、この人に奨励賞をあげたいと思います。

— 事務局発表 125番は宮城県の佐藤成之さん。男性です。—

▼対馬 私は最後まで推した32番。このまま頑張ってくださいという可能性に賭けます。

— 事務局発表 32番は福井県の松原藍夏さん。女性です。—

▼大石 私は、さつき申しましたように64番を奨励賞にしたいと思います。このままどうぞ素直に伸びて下さい。

— 事務局発表 64番。兵庫県の小田涼子さん。女性です。—

▼事務局 長時間にわたりありがとうございました。

表彰式は、平成15年4月19日に松野町で開催されます。皆さんのご参加をお待ちしております。

また、この新人賞の次回は三年後を予定しております。